

19世紀イギリスの工業村

—田園都市理論の先駆け・実験場としての工業村：三つの典型例—

1. はじめに
2. ソルテア (Saltaire)
3. ポート・サンライト (Port Sunlight)
4. ボーンヴィル (Bournville)
5. おわりに—田園都市論と工業村

石田 頼 房*

要 約

エベネザー・ハワードが1898年にその著書『明日』(後に『明日の田園都市』)で発表した田園都市論は、単なる理想都市論ではなく、極めて実現性の高い計画論であった。しかし、発表当初はハワードの理論も「空想的」とみなされていた。それを空想ではないと感じさせたのが、ボーンヴィルやポート・サンライトなどの既実現しつつあった工業村だった。もともと、ハワードの田園都市論は19世紀を通じてイギリスでみられた工業村などの試みや、土地公有化論を基礎に考えられたものである。さらに、ボーンヴィルのカドベリーやポート・サンライトのレヴァーなどの、工業村の創始者である工業主はレッチワース田園都市を建設した第一田園都市株式会社の有力出資者でもあった。いわば、田園都市論も田園都市も工業村をぬきにしては語れないのである。しかし日本では、工業村については断片的な紹介しかされていない。この報告では、19世紀イギリスの工業村の内でも最も著名なソルテア、ポート・サンライト、ボーンヴィルの三事例を取り上げ、その計画と建設の歴史、その後の変化、現状について述べる。

1. はじめに

1989年9月、英国バーミンガム市のボーンヴィルで、国際的計画史研究グループである Planning History Group¹⁾(以下 PHG と略称)の第4回都市計画史国際会議が、「田園都市の再検証」(Garden City Re-examined)をテーマに開催された²⁾。ボーンヴィルは、実は1888年にチョコレート工場主のジョージ・カドベリーとリチャード・カドベリー兄弟が工業村として建設を始め、やがてボーンヴィル村信託財団を創設して理想的住宅地として今日まで発展させてきたところである。エベネザ

ー・ハワードの「明日(の田園都市)」³⁾が1898年に出版され、1901年にはできたばかりの田園都市協会の会合がこのボーンヴィルで開かれた。理論に先行して既に建設されていた「田園都市」ボーンヴィルを見て、多くの参加者は理論に確信を持ったといわれる(Harrison, 1989)。このように、いわば田園都市理論の実験場でもあったボーンヴィルで、「田園都市の再検証」をテーマに国際都市計画史会議が開かれたことは、まことに意義深いものがあった。参加者は世界18カ国から80余名にのぼり、私も“Japanese Industrial Villages and a Reformist Factory Owner”(日本の工業村と改良主義工場主)という報告を行なった。また、

* 東京都立大学都市研究センター

この会議の前に、19世紀イギリスの工業村の例として有名なブラッドフォード近郊のソルテア、リヴァプール近郊のポート・サンライトも実際に見学した。私自身の発表は、その後英国の *Planning Perspectives* 誌に掲載されたので⁴⁾、ここでは視察したイギリスの三つの「19世紀の工業村」について、その計画の歴史と現状を報告したい。

ソルテア、ポート・サンライト、ボーンヴィルなどの、19世紀イギリスの工業村は日本でも有名で、多くの都市計画の教科書にもこれらの工業村の図面が載り簡単な紹介がされている⁵⁾。しかし、詳細な紹介は翻訳を含めて余り多くはなかった。各工業村についての過去の紹介例については、それぞれの章で述べる。工業村の全般に関する日本語の文献としては、古くは内務省地方局有志『田園都市』1907、最近では、L. ベネヴォロ (横山正訳)『近代都市計画の起源』1976、片木篤『イギリスの郊外住宅—中流階級のユートピア』1987、W. アッシュワース (下総薫監訳)『イギリス田園都市の社会史—近代都市計画の誕生—』1987などがあげられる。例えば、ベネヴォロは、工業村の計画を生み出した社会情勢あるいはディズレーリの「シヴィルあるいは二つの国」など⁶⁾ についての詳しい記述の後、三つの工業村の図版を掲げ、ソルトとソルテアについてほんの少し言及している (ベネヴォロ、1976: 156-173)。片木氏は、ソルテア、ボーンヴィル、ポート・サンライトについて25ページを使って説明しているが、関心は主としてその建築・都市デザインに向けられているといえよう (片木、1987: 168-192)。なお、ボーンヴィルとポート・サンライトの建築・都市デザインに関しては、Creese (1966) が深く検討している。下総氏によるアッシュワースの訳書は、「第5章 モデル都市の建設」の中で三つの工業村の建設の経緯について数ページずつを使って述べており (アッシュワース、1987: 148-157)、オーエンのニューラナークからハーワードの田園都市論とレッチワースにいたる歴史的流れの中で、工業村の実践の持つ意味を理解するに有用な文献であるが、計画の内容や計画論に関しては余り深く触れられていない。

このように工業村に関する日本における紹介は必ずしも十分ではなく、特に、工業村を19世紀の歴史的事実としてだけでなく、その後の変化や現に住み続けられている住宅地としての最近の状況を含めて検討しているものは、個々の工業村についてみても、後で触れるボーンヴィルについてのもの (下総、1971) ぐらいであるから、19世紀のイギリス工業村の中でも最も輝かしい実績を残したソルテア、ポート・サンライト、ボーンヴィルという三つの工業村の歴史と現状について述べようというこの小論も十分意味があると考えられる。

2. ソルテア (Saltaire)

(1) はじめに

ソルテアはブラッドフォードの織物業者のタイタス・ソルトが1850年代から1870年代の始めにかけて建設した工業村である。ソルト (Salt) がエア (Aire) 川の流域に建設したということからソルテア (Saltaire) と名付けられた。19世紀の工業村としては最も初期のものであり、その規模も住宅数731戸、人口4000余人とかなり大きかった。

この工業村については、後述のように岩倉具視使節団が1872年10月に訪問しており、したがってその記録の中で紹介されている (久米、1878: 岩波文庫版1978, 2巻, 284-288)。また、ソルテアに関する今までの論文としては、サトウ (1961)、小林 (1974 b) など経済学関係者の論文がある。サトウ (1961) は、主として W. Smith の文献 (*The History and Antiquities of Morley, in the West Riding of the County of York. 1876*) を資料としてソルトとソルテアについてかなり詳しく紹介している。しかし、ソルテア工業村の計画に関する記述は典拠の欠陥によるものか、かなり不正確である。例えば、住宅戸数を77戸としたり (注では別資料により775戸としている)、また、公共建築の建設時期なども Institute (公民館) の建設時期を1854年 (正しくは1869年着工, 1871年完成) とするなど誤りがある。さらにソルテアには「ストライキも解雇もなかった」という文章を、何の疑問も差しはさまらずに引用しているように全体と

してソルトとソルテアを少し美化し過ぎたきらいがあろう。小林(1974 b)は、W. Ashworth の著書 (British Industrial Village in the Nineteenth Century) および G. D. H. Cole による伝記 (Sir Titus Salt) をもとにソルトとソルテアについてかなり正確に紹介し、あわせてソルテアを訪問した岩倉使節団の『米欧回覧実記』(久米, 1878) 中の記述についても詳しく触れている。ただ、都市計画史の立場からみるとソルテアの計画内容についてももう少し詳しい紹介が必要であろう。

(2) タイタス・ソルトとアルパカ織物

ソルテアを計画し、建設したタイタス・ソルト (Titus Salt, 1803-1876) (図-1) は、1803年に農家の息子として生まれた。1822年父親が農業をやめ、ブラッドフォードに出てきて羊毛商を始めたので、彼もブラッドフォードに移住した。2年間毛織物工場に勤め、さらに10年間父親の商売を手伝った後に、1834年31才の時に独立し毛織物生産に従事した。

彼が毛織物工業で成功したのは、当時南米から

輸入されたものの毛足が長い加工できず、リヴァプールの港に放置されており無価値に近かったアルパカの毛の加工機械を工夫したことによるという。同じくアンゴラ山羊の毛の繊維化にも成功し、1843年ごろまでには相当な財産を築き、ブラッドフォード周辺に五つの工場を持ち、広く海外とも取り引きするまでになった⁷⁾。

タイタス・ソルトは、「さして教養も教育もない人物」との評⁸⁾もあるが、これは、一つには彼がロベタで公衆の前で演説をしたり議論をしたりしなかったということと、書かれた文書がほとんど残っていない(書かなかった)ことによるといわれる (Reynolds, 1985 : 4-6)。確かに彼はあまり高い教育を受けていない。しかし彼が「宗教活動のために気前よく施しものをする程度のひとであった⁹⁾」という評価は少々酷であろう。ソルトは確かに Congregational Church に属し、Dissenter-Radicals の運動にも参加し、熱心な宗教活動を行っていたという (Reynolds, 1985 : 5-6)。しかし、彼の活動は、宗教的活動という性格だけではなく、また、自分の工場の従業員のための慈善事業にとどまらず、ブラッドフォード市政を担当したことなどを通じて、一般的な社会改革への関心も十分に持っていたと思われる。

(3) ソルテアのアイデア

ソルトが活動し、ソルテアが建設されたブラッドフォードは産業革命期の都市悪がもっとも集中していた都市といわれていた。ブラッドフォード市は、既に14世紀には毛織物工業があり、18世紀には毛織物工業都市として急速に発展し、世界の羊毛取引の中心、毛織物工業の中心となった。ソルトがソルテアの建設に着手する1851年頃には、過去40年間に人口が10倍にも増え、10万人を超えるという有様であった。このように急速な工業化・人口増加を見たため、そのかかえる都市問題は深刻で、産業革命期のイギリス工業都市の中でも最悪と言われた。他の工業都市の状況もブラッドフォードに比べれば極楽で、煉獄の責め苦がどんなものかブラッドフォードに住めば分かるとさえ言われたという (Reynolds, 1985 : 8-11)。

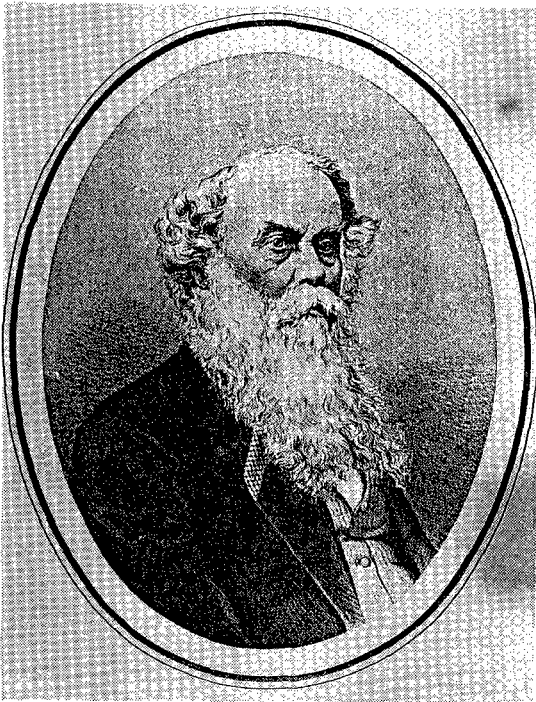
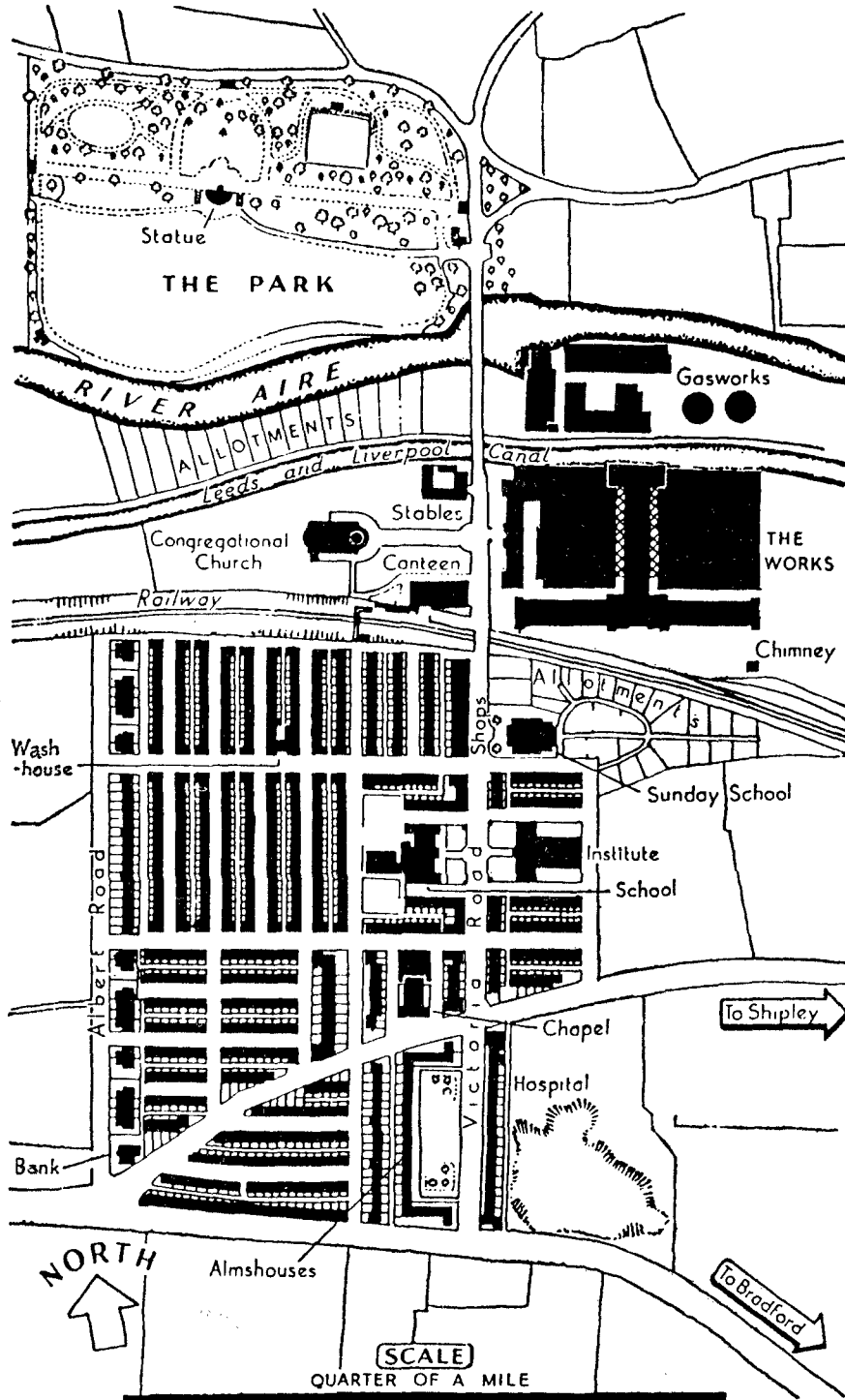


図-1. タイタス・ソルト (Reynolds, 1985より)



図一2. ソルテア完成時の図 (Cherry, 1988より)

ソルトは1847年から市参事会員となり、1848—1849年には市長を勤めた。1848年という年はヨーロッパにとっては特別な年であり、各地で革命運動が起こった年である。ベネヴェーロがその近代都市計画史に関する著書（ベネヴェーロ、1976）の中で「1848年とその結果」という章を起こしているのも、この年が都市計画を含めた19世紀の文化・政治の一つの転換点であったからに他ならない。ソルトがブラッドフォード市長を勤めていたのは、まさにその1848年だったのである。この年に、ブラッドフォードでもチャーティスト（Chartist）の運動がおこった。ソルトはチャーティストの運動に比較的好意的であったといわれる。さらに、1849年にはブラッドフォードでコレラが蔓延し、公衆衛生・住宅問題などの都市問題の解決が重要な課題となった。

ソルトは市長として、また、財産家として、このような問題に取り組んだのである。

ソルトが、どの様にしてモデル工業村であるソルテアの建設を考えるに至ったかは必ずしも明らかではない。短期間ではあるがブラッドフォード市長として、都市問題に直面し、その解決に当たったソルトが、住宅都市問題の解決の手段としてみずから理想的社宅群を計画したということは考えられる。ディズレーリの小説シビル¹⁰⁾との関係を考える人もあり¹¹⁾、ブラッドフォードにおける最も熱心なオーエニスト¹²⁾であるサミュエル・パウアー（Sammuel Bower）がソルトの知人であったことから、彼との会話から構想されたと考える人もいるという（Reynolds, 1985: 7）。また、ブラッドフォードでは18世紀の後半には既に労働力不足が生じていて、ソルトが工場をブラッドフォードの中心から離れた場所に統合移転したため、住宅の建設が不可避であったに過ぎないという見方も存在する¹³⁾。

これは、ポート・サンライトのレヴァーやボンヴィルのカドベリーについてもいえることだが、彼らの工業村の発想を特定の書物や特定の人物あるいはエピソードと結び付けるといよりは、ベネヴェーロ（1976）やレイノルド（1985）が述べているように、産業革命にともなう労働者階

級の状況と運動、1848年の革命など社会の全体的状況の中で理解することの方が重要であろう。当時は労働者階層の住宅改善も工業村の試みを含めて多様に展開されていたのである（Clark, 1920；アッシュワース、1987）。

（4）ソルテアの計画と建設¹⁴⁾

前述のように、ソルトはアルパカ織物、モヘアの工業化に成功し、1840年代には大きな成功を納め、発展する自分の企業のため、分散していた工場を統合し、新しい工場を建設する必要に迫られていた。その新工場の敷地として選定されたのが、ブラッドフォード郊外のエア川に沿った牧場地帯であった。工場の敷地はエア川の南岸、リード・リヴァプール運河および鉄道に沿った土地が選ばれ、1851年に5階建ての巨大な工場の建設が始まり、1853年には完成した。引き続き、村の建設が行なわれ1871年までにはほぼ完成した。

ソルテアの敷地は、エア川の両岸、エア川に向かって緩く傾斜する49エーカー（約19.8ha）の土地を占めていた。地形は北側はやや傾斜がきつく、南側は比較的緩やかである。エア川はほとんど東西に流れ、これとほぼ平行してリード・リヴァプール運河と鉄道がある。ソルテアの計画は、この東西軸（特に鉄道）とこれに直交して計画されたビクトリアロードが二つの軸線を形成しており、大まかなゾーニングと施設配置はこの二つの軸線によって規定されていた（図—2）。なお、ビクトリアロードは道路橋が廃止されたため、現在はエア川で止まっているが、当時はエア川をわたって北方に伸びていた。

ゾーン区分を見ると、まず、敷地の北の部分、リード・リヴァプール運河を南端、ビクトリアロードを東端とする地区は公園・緑地ゾーンである。ビクトリアロードの東側で、エア川と鉄道で挟まれた土地には、中央にリード・リヴァプール運河があり、工業ゾーンである。ビクトリアロードの西側の運河と鉄道に挟まれた土地には、教会・食堂・馬小屋等があった。この部分は、会社・工場に関連する施設ゾーンといえるだろう。鉄道の南側は住宅地となっていたが、そのうちのビク

トリアロードに沿った部分には、商店・学校・公民館 (institute)・病院・養老院 (almshouse) などの公共施設が配置されていた。土地利用計画としては、大まかに、北から緑、働く場所、居住という帯状の配置になっていたのである。

土地利用をもう少し詳細に見てみよう。公園緑地部分はさらに三つに分けられる。エア川の北岸は全体として公園（現在ロバーツ公園と呼ばれている¹⁵⁾）であるが、地形により二段に分かれており、上段は庭園、下段は運動場になっている。エア川の南岸低地はアロットメント（菜園）になっており、岸边にはポートハウスが1871年に作られ、水車のための堰によってできたエア川の淀みを使ってポート遊びが出来るようになっている。工場など働く場所のゾーンを規定しているのは、エア川、リード・リヴァプール運河と鉄道である。工場建設当時、物資は主として運河を通して搬出入されており、現在でも船着き場の跡がある。ビクトリアロードの東側、リード・リヴァプール運河と鉄道の間で工場と管理事務所が、運河の北側にガス工場が建設された。工場は5階建ての巨大なものであった。ガス工場は工場だけではなく住宅地にも熱源を供給したといわれる。1868年に運河北側の古い水力工場 (Dixon's Mill) のあった敷地に New Mill が建設されて工場の現在の形が完成した。運河と鉄道の間でビクトリアロードの西側には、教会 (Congregational Church) および馬小屋と工員食堂があった。1859年に完成した600人を収用する教会はソルテアに建設された最初の公共建築であり、工場の正面にあることから見てもこの施設を通じてソルトが従業員の感化に意を用いたことが分かる。工員食堂は7~800人収用で通勤者を中心に毎日食事を供給していたし、興味深いことに工員が自分で持参した食糧を調理することもできたという¹⁶⁾。

鉄道の南側の住宅地部分に目を転ずると、北側を鉄道とそれに沿ったアルバートテラス、西側をアルバートロード、南側をゴードンテラス、東側をおおよそビクトリアロードで限られた、約25エーカー（約10ha）の範囲が住宅地である。西南隅の交差点から北東に斜めに延びるソルテアロード

を除けば、他の街路は東西南北に走り長方形街区を構成している。街路には総てソルトの家族や縁者の名前がつけられている。

ソルテアの住宅の建設は、1854年にまずキャロライン街の北側の部分で始められ、その年の内に100数十戸の住宅が完成している。その後1857年にキャロライン街とタイタス街の間の部分、1860年代にそのほかの部分で建設され、1868年までに775戸の住宅・商店が完成している。したがって工場完成からしばらくの間は、ソルテアでは住宅が不足しており、ブラッドフォードから特別仕立ての列車で通勤が行なわれていたという（アシュワース、1987:149）。

ソルテアの住宅地の特徴は「住宅団地」として、職階別の住宅供給が行なわれていたことである。住宅はすべて石造であるが、そのタイプは、アルバートロードに面した幹部向けの庭付き2戸建て住宅、現場主任クラスの前庭付き3階建て3寝室テラスハウスから、労働者向けの前庭のない2階建て2寝室長屋まで様ざまである。家賃も年6.5ポンドから18ポンドまでにわたっていた。ソルテアの労働者向け街区は、一見して当時一般的であったいわゆるバイロウ・ハウジングの域をでないともいえる。しかし、大部分の街区では表通りも裏路次も行き止まりではなく、一応の良好な日当たりと風通しがあり、各戸に裏庭を持ち、下水道を含む供給処理施設が整備されていたので、1860年代当時の労働者住宅に比べて格段に優れたものであったことは間違いがない。

住宅地部分の公共施設は、主としてビクトリアロードに面している。なお、現在あるゴードンテラス商店街（地区の南端部）は建設当時はなかったものであり、その後、住宅の前庭をつぶして商店が建設された。ビクトリアロードの駅に近い部分の西側には商店が設けられた。商店の向かい側に、ソルテアで一番最後、1876年に建設された教会付属の日曜学校が建っていたが、取り壊されて現在はない。ビクトリアロードの中央部分には学校と Institute が向かい合って建っていた。それぞれが小さな前庭を持っており、それが一体となって村の中心の広場といった感じをつくり出して

おり、その四隅に置かれたライオンの像が、その様な雰囲気強めている。Institute は、図書館・公民館とでもいうべき機能を持った建物で、自分の工場の労働者の退廃を嫌い、村にバブを置かせなかったソルトが、それに代わる村民の交流の場所として考えた施設であった。ビクトリアロードの南端には道をはさんで、養老院 (Almshouse) があり、その一角に病院がある。養老院の前のアレクサンダー広場は、植樹のほとんどないソルテアの住宅街では唯一の緑化された広場である。この他、キャロライン道路に面して共同浴室 (男女各12) と洗濯場があった。この施設は建設当初から村人、特に婦人達には余り好まれていなかったというが、取り壊されて現在はない。ソルテアロードに面したメソジスト教会は、1868年にたてられ1970年に取り壊された旧教会の跡地に最近たてられたものである。

(5) 岩倉使節団のソルテア視察

1872年から1873年にかけて欧米諸国を歴訪した岩倉具視使節団は1872年10月25日にソルテアを訪問している¹⁷⁾。岩倉使節団の訪問時期は、1871年の完成直後であったから、使節団はこの工業村の出来上がったばかりの姿を見ることが出来たわけである。ソルテアを訪問した一行には、副使伊藤博文は参加していなかったが、岩倉具視大使をはじめ、大久保利通、木戸孝允、山口尚芳の三副使他数人が参加していた。

岩倉使節団一行はソルテアで何を見、何を感じたのだろうか？ 岩倉使節団の記録『特命全權大使米欧回覧実記』(久米, 1887)では、ソルトのアルパカ毛織りの成功とソルテアの建設の経緯を簡単に述べたあとで、ソルテア工業村について次のように述べる¹⁸⁾¹⁹⁾。

「○邑中ニ小学校ヲ建ツ、村民ノ子弟男女ヲシテ、半日ハ場ニ出テ、業ヲ操リ、半日ハ校ニ入りテ教ヲ受ケシム、タネリツク フラチコル学知ト実験ト、互ニ相進メル良法ニテ、且製作場ヨリ給料ヲ受ルハ、其子弟ニ利アルノミナラス、製造ニモ亦利アリ、英国人ハ、職工ヲ保護シ、貧民救護ニカヲ尽スヲ、榮譽ノトナス、此場主ノ用意モ、亦感賞スヘシ、校中ニ

テ教ヘル科ハ、小学普通ノ科ヲ授ク、男女トモニ知ラサルヘカラサルノ芸術ニテ、高尚ノ科ニ及ハス、○校ノ前ニ養老院アリ、職人ノ老衰シテ用ヲナサ、ルモノハ、此ニ入レテ恤養ス、又病院アリ、村中ノ病人ヲ医療ス、建立ノ寺アリ、村民ヲシテ此ニ詣リテ説教ヲ受ケ、其心性ヲ正シクス、前後ノ製造場ニテ、此如ク備ハリタルモノナン、邑中五千ノ人口、ミナ「タイトル」氏²⁰⁾一家ヲ仰ク、此ヲ職工市街ノ仕組トス、勸工ノ道ニ於テ、深く意味アルコトナリ」

つづいて、見学した工場におけるアルパカ、「モルヘア」の紡績、織布の工程を詳しく記録している。昼食後、公園を散策し、その印象を次のように記録する。

「○此日其書記局ノ側ヲナル広堂ニ於テ昼食ヲ供ス、夫ヨリ邑外ノ公苑ニ至ル、是モ「タイトル」氏ヨリ修メテ、職人ニアタヘタルモノナリ、「テヤ」河ニ望ミタル、平岡ノ上ニアリ、背ニ岡巒ヲ負ヒ、頗ル風景アリ」

岩倉使節団は、サー・タイタス・ソルト自身には、彼が外出中ということで会えなかった。村を案内したのは息子達であったという。米欧回覧実記は、近代工業の生産過程に関する極めて注意深い観察と記録を行なっているが、ソルテアもその例外ではなく、職工市街より工場の生産過程に多くの関心が払われているように見受けられる。しかし、「職工市街ノ仕組」、すなわちバターナリズムに基づく工業村の仕組みが工場側にとっても充分利のあるもので、工業の発展にとって重要であるとも指摘していることは注目すべきであろう。なお、「職工市街」に関するさらに一般的記述は、パリのナポレオン三世の都市改造のところにも出てくる²¹⁾。

(6) ソルテアの実情とその後

岩倉使節団が理想的と見た「職工市街」の実態はどうであっただろうか。ソルテアは、なんといつてもソルトの強い宗教的・理想主義的思想にもとづく計画であった。しかし同時に、ソルトはかけた費用に関する収入をしっかりと確保することも忘れなかった。職工用食堂でさえ、ソルトは委託し

た業者から投資した資金の5%に当たる使用料を徴収したという²²⁾。また、ソルトが労働者にモラルとして期待したものは、ある場合には労働者に対する彼の考え方の押しつけともいえる面を持っていた。それは、公園の使い方に関するルールのようなもの—それは相当細ごまとしてはいたが、ともかく共同利用の施設に関する利用のルールであった—にとどまらず、ある場合には個人生活に対する干渉ともいえる面にまで及んでいた。例えば、労働者の飲酒や、共同浴場・洗濯場の利用や干し物の干し方などに関する問題などに端的に現れていた。ソルトは洗濯物が裏庭に干されているのをたいへん嫌ったといわれるが、乾燥機などの無かったこの時代に、いったいどこに干せというのだろうか？ 現在のソルテアでさえ洗濯物は裏庭に堂々とひるがえっているのである。

『米欧回覧実記』では「邑中五千ノ人口、ミナ「タイトル」氏一家ヲ仰ク」と述べていたが、実は1868年、岩倉使節団が訪問する数年前に既にソルテアにおける最初のストライキが4日間にわたって行なわれていた。また、ソルトはソルテアにおけるパブの建設も認めていなかったが、村民は村外のパブに結構通っていたという。ソルトが用意した共同浴場・洗濯場も村の女性達からは概して不評であった。1876年には、労働者は低賃金を不満とし再びストライキを行ない、経営者から一定の譲歩をかち取っている(Reynolds, 1985: 30)。パターナリズムによる経営も、このように労働争議を全く回避することは出来なかったのである。このような状況の中で、ソルトは1876年12月に死去した。

ソルト死後のソルテアは、後で紹介するポート・サンライトやボーンヴィルが最近まで建設当時の理想のままに維持され、あるいは発展しているのと異なり、むしろ不幸な運命をたどる。

1876年に、村の最後の建物である教会立日曜学校(Congregational Sunday School)が建設され村は完成する。その後の動きでは、1887年に村で博覧会(Royal Yorkshire Jubilee Exhibition)が開かれ、そのときに、村の東端(Instituteの裏側)の展覧会通り(Exhibition Road)に沿った土地

に College of Further Education が設立されたのが目をひくくらいである。

1894年、ソルト死後18年で工場および村は地元の資本家集団の所有となった。なぜ、このように早く破局がおとずれたのかはわからない²³⁾。さらに、1902年には所有権は資本家集団の一人であるロバーツ(J. Roberts)の手にうつる。翌1903年にロバーツは公園の上段部分にサー・タイタス・ソルトの銅像を建設する。この銅像は現在も立っているが、そこから銅像のソルトの視線をたどるとエア川を越して教会や荒廃した工場とその向こうの村の家並みが見渡せる。

ロバーツの死後には、ソルテアの運命はさらに暗いものとなり、所有権は転々とし、1933年には、村部分が工場から切り放されてブラッドフォード不動産会社(Bradford Property Trust Co.)に売却され、モデル工業村としてのソルテアの歴史は閉じることになる。

(7) 住まわれているソルテア、その現状

ソルテアの工場は、現在はイリングワース・モリス・グループ(Illingworth Morris Group)の所有になっているが、もはやほとんど操業していない。私が訪問したときには、工場の管理事務所の一角で Mill Shop と称して織物や雑貨などが販売されているほか、一部が美術館に転用されて使用されているに過ぎない状況であった。最後につくられた新工場(New Mill)などは、既に窓ガラスが割れ荒廃しかけている。ソルテア駅が1965年に一旦廃止されたのも、このことと無関係ではあるまい。

住宅地部分についても、荒廃しているという説が日本では流布されていたが、実際には分譲され、リードおよびブラッドフォードなどへの通勤住宅地として住まわれている。ソルテア駅は1984年に復活し、ブラッドフォードおよびリードから1日30往復を超える頻繁な列車の便がある。リードから16分、ブラッドフォード・フォスタースクエア駅からはわずか6分に過ぎない。

砂岩でつくられた住宅は確かに黒ずんで、見た目には大変古びているが、むしろそれは保存地区

に指定されて外観の保全が義務づけられているためである。しかし、内部の近代化は認められており、多くの住宅は設備・配管・内装を新しくし、あるものは梁・床まで更新されている。また、地元の建築事務所の主催で裏庭美化コンクールなどが開かれていたりして、住民が愛着を持って住んでいることがわかる。

現地の不動産屋などで調べた住宅の価格は、3ベッドルーム型で、36,950ポンド、39,500ポンド、49,950ポンドなどであり、日本円に換算すれば、900万円から1,200万円くらいにすぎない。いずれも一定の内部近代化済みのものであるが、最後の例はガス・セントラル・ヒーティング付き物件であった。

確かにソルテアはモデル工業村としての生命を終わってから既に久しいが、19世紀のイギリス工業村の最も早い時期の、しかも典型的な事例を示す歴史的遺産として重要であり、またそのような位置づけで保存されている。特に日本都市計画にとってみれば、欧米近代都市計画の源流の一つともいえるこの事例と、その完成の時期に既に接触があったということの持つ意味は大きいといわなければならない。

3. ポート・サンライト (Port Sunlight)

(1) はじめに

ポート・サンライトは石鹼製造のレヴァー兄弟会社が、1888年から1938年にかけてリヴァプール郊外に建設したモデル工業村である。規模はソルテアとくらべて、住宅戸数ではやや大きく、敷地面積でははるかに大きい。また環境的にみても、多くの緑地、街路樹のある幅広い道路、凝ったデザインの低密度の住宅地など、後の田園都市・田園郊外のデザインにもつながって行く優れた住宅地環境を実現していた。なお、レヴァー兄弟社は、世界的洗剤メーカーである現在のユニレヴァー社の前身である。

私は寡聞にしてポート・サンライトを日本に紹介したままとった論文の存在を知らない。前に述べたように、片木篤は三つの工場村について主と

して建築・都市デザインの立場から紹介しているが、その中でもポート・サンライトに最も多くのページをさいている(片木, 1987: 183-192)。確かにポート・サンライトは建築・都市デザインの観点から取り上げるにふさわしいピクチャレスクな村であり、またその後の都市デザインに与えた影響も大きい。しかし、片木は都市デザインの点でも重要な村の都市計画の変遷にほとんど触れていないし、村の建設後現在に至る変遷過程については全く述べられていない。下総薫監訳のアシュワースの著書では、村の都市計画の内容については全く触れられていない(アシュワース, 1987: 155-157)。その意味で、ここにポート・サンライトの計画の歴史と現状を紹介するのは一定の意味があろう。

(2) レヴァーとサンライト印石鹼²⁴⁾

ポート・サンライトを計画し建設した人物であるウィリアム・ヘスケッチ・レヴァー (William Hesketh Lever, 1851-1925) (図-3) は、ソルテアのソルトやボーンヴィルのカドベリーと違っ



図-3. W. H. レヴァー (Williams, 1988より)

て、もともとは工業家ではなく、雑貨卸小売商であった。彼が生まれたのはマンチェスター北西のボルトン (Bolton) で、1866年、15才のときからボルトンおよびウィーガン (Wigan) にあった父の食料品卸商 (Lever & Co) で働いた。1874年にレヴァーはエリザベス・ヒューム (Elizabeth Hulme) と結婚している。彼は、この妻の姓と自分の姓をあわせて、後にレヴァーヒューム卿と名乗るわけである。石鹼とのかかわりも、まず石鹼の販売をしていて、その販売方法の革新から大きな利益をえたことに始まる。その革新的方法とは、それまで石鹼は大きな塊を店先で切って販売していたのを、現在のように工場ですべて生産し、こぎれいな紙で包んでブランドをつけて販売するということであった。そのつけたブランドが「サンライト」(Sunlight) だったのである。1884年に始めたこのサンライト印石鹼の販売は大成功をおさめ、それまでの委託生産では間に合わなくなり、1885年にリヴァプール郊外のワーリントン (Warrington) に工場を借り独自生産を開始した。ここで初めてレヴァーは工業家になったのである。この借り上げ工場による生産でも発展する事業に不足であるということから自己工場における生産に踏み切ることになり、1886年に現在のポート・サンライトに工場用地を取得、1888年に工場の建設に着手した。このとき起工式の夕食会で、レヴァーは工業村の構想を示唆するスピーチを行なったという。これらの経緯から考えると、ポート・サンライト工場とその社宅団地を建設するまでは、レヴァーは自ら工場労働者を雇うということがなかったから、その労働者の生活を通じて労働階層の劣悪な住宅問題に直面することも、ほとんどなかったのではないだろうか。この点はソルトやカドベリーが自分の工場の労働者の生活や健康問題を通して住宅問題を受けとめていたのとは少し事情が違うように思われる。また、ソルトが市長として、カドベリーが社会運動家として、労働者の健康・衛生問題、住宅問題、さらにはモラルの問題などに触れ考えていたのと、事情の違いを感じさせる。

確かにレヴァーは、労働者に対する「利益の分

配」という考え方を、彼の工業村の理念として掲げる。Sellers は、レヴァーの考えはそれ以前の労働者の住宅改善に関する実践の延長上にあり、特に彼の生地ボルトンの近くでアシュワース家が建設したイーグレイやエジャートンの工業村の実例を知らなかった訳はないと、その影響を示唆する (Sellers, 1988: 10)。しかし、むしろポート・サンライトの建設やロンドン郊外ハムステッドヒースに建てられたレヴァー自邸などを通じて見えてくるレヴァーの性格は、芸術愛好家、建築マニアとしての性格である。実際、ポート・サンライト工業村は、そう言いたくなるほど、多数の建築家たちに設計させた凝りに凝ったデザインの芸術的な建築に満ち溢れている。

(4) ポート・サンライトの計画と建設

1886年、自分の工場を持とうと考えたレヴァーは建築家ウィリアム・オーエン (William Owen, 1846—1910) とともに新工場用地を探し、現在の敷地を選定した。その土地はリヴァプール市の対岸にあたるパーケンヘッド (Birkenhead) からチェスター (Chester) へ通ずるパーケンヘッド鉄道で6キロメートル程の湿地帯であった。敷地は鉄道と新チェスター街道に挟まれ、敷地の一角にマーシー河に通ずるブロンバラ・プール (Bromborough Pool) があって、ここがリヴァプール港からのほしけの船着き場になっていた²⁵⁾。また、船着き場から背後地に通ずる軌道があった。当時のこの敷地周辺の土地利用は、現在のポート・サンライト駅はもちろんなく、ベビントン駅が敷地の東南の隅にあり、その周辺には低質な住宅が立地していた。この住宅地はやがてポート・サンライトの拡張で敷地に含まれることになり、取り壊されることとなる。ブロンバラプールの周辺にはいくつかの工場が既に立地していた。しかし全体としてみれば、未開発の荒れた土地であったといえよう。

敷地選定の理由は、なんといっても交通の便が良いこと、地価が安いこと、労働力が得やすいことであったという。なお、リヴァプールの港湾施設からやや離れていることから、この敷地は港湾

施設の負担金を支払わないでよいという利点もあったという。

1887年に、レヴァーは56エーカー（約22.7ha）の土地（最終的には用地は170エーカー、約68.8haに達した）を購入し、軌道から南の部分工場用地に北の部分住宅用地に当てる計画とした。工場は、1888年に起工式を行い、翌1889年には石鹼生産を開始している。

村の起工はやや遅れ、1889年に建設が始まっている。前述のように、1888年の工業の起工式の後の夕食会でレヴァーは既に工業村計画を示唆していたという。村の最初の計画はレヴァー自身のアイデアにもとづいてウィリアム・オーエンが計画したといわれる。レヴァーが工場の配置に関して1912年に書いたといわれるスケッチが残っている（Williams, 1988: 9）ところを見ると、最初のプランがレヴァーのアイデアにもとづいて描かれたということは有り得ることであるが、最初にどの範囲について、どのような計画がたてられたかは、図面が残っておらず不明である。我々が工業村の最初の姿を知ることが出来るのは、1889年の地図（Hubbard & Shippobottom, 1988: 8）によってであり、そこには、ボルトン道路（Bolton road）の一部とそれに沿う住宅の一部が既に建設

されているのが示されている²⁶⁾。しかし、そのボルトン道路の位置は、1882年の地図（Sellers, 1988: 口絵）に見られる農地の筆境そのものであり、計画性を持って引かれているとはいえない。

ポート・サンライトの住宅地部分の計画を見るとき、最初につくられ、現在 The Dell と呼ばれている部分と他の部分との計画がかなり違うことがわかる。The Dell の住宅地には、四つの街区があるが、いずれも比較的小さな街区で構成されている。現在駅前になっている街区はやや広く、中央にアロットメントを持っているが、そのほかの街区は比較的狭く、各街区の中央にサービスの裏通路があり、各住戸敷地は表の道路と裏のサービス通路に接している。二戸建てまたは長屋の住宅が極めて注意深く設計されていること、街区の形態が単純な長方形でない点を除けば、ごく普通の街区設計である。これに対して、それ以後に建設された街区は、一種のスーパーブロックであり、一つの街区が2～4haもの規模を持っていること、住宅敷地の背後が大きなアロットメント（菜園）になっていることなど、全く新しい考え方で設計されているのがわかる。一説には、将来より多くの住宅を建設するため、このアロットメントの部分を通る道路を一本増やし普通の街区と

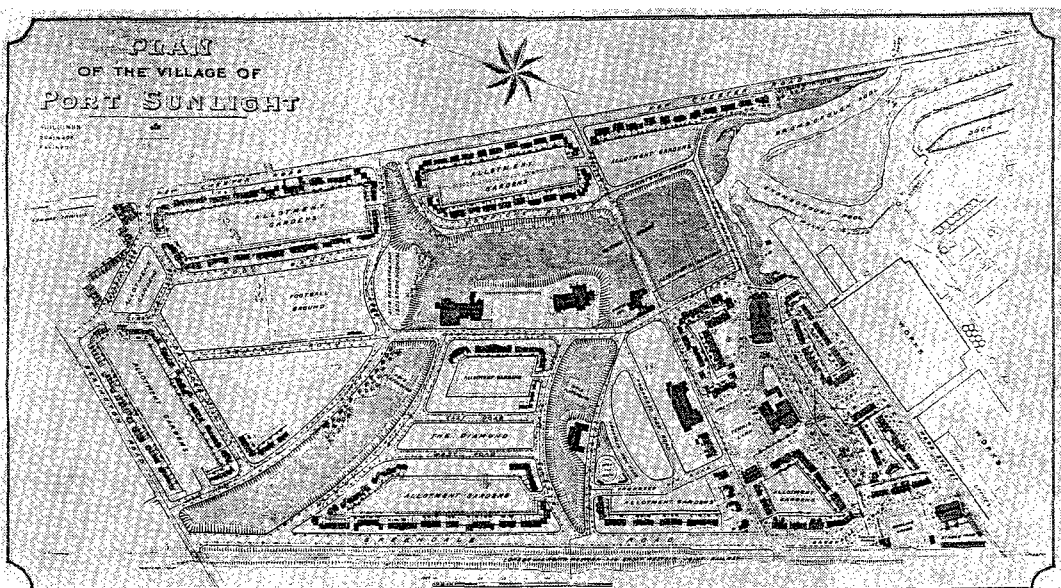


図-4. ポート・サンライト、初期1902年の計画（Hubbard & Shippobottom, 1988より）

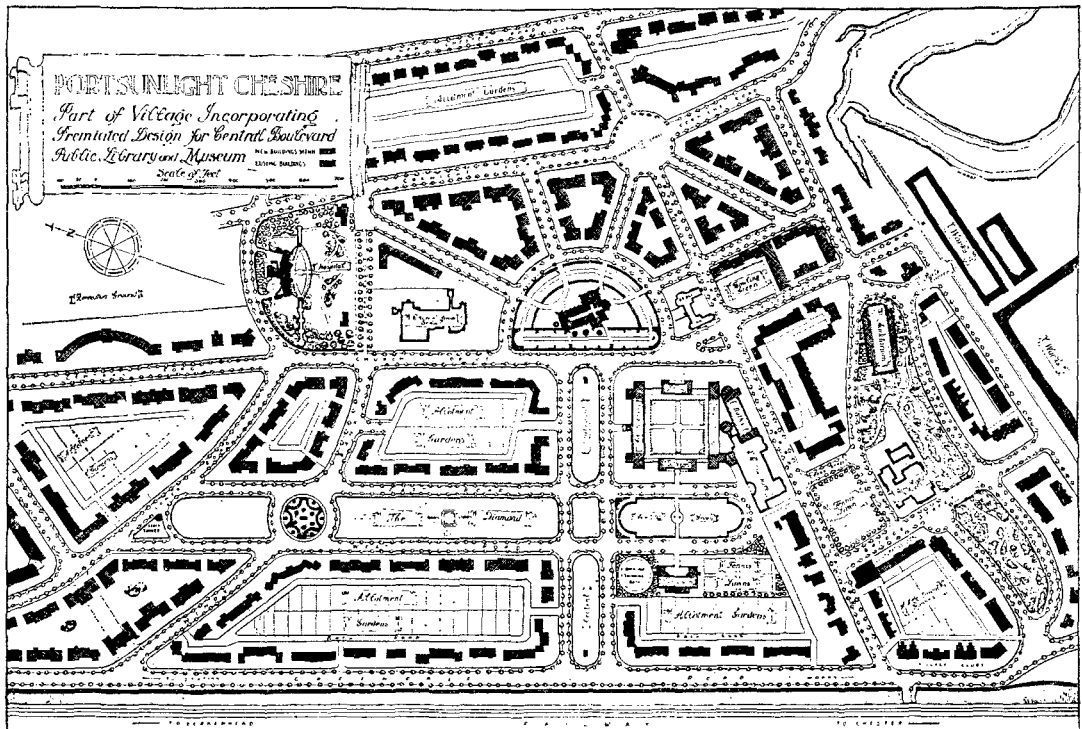


図-5. ポート・サンライト, 1910年のプレストウィッチの計画 (出典, 図-4と同じ)

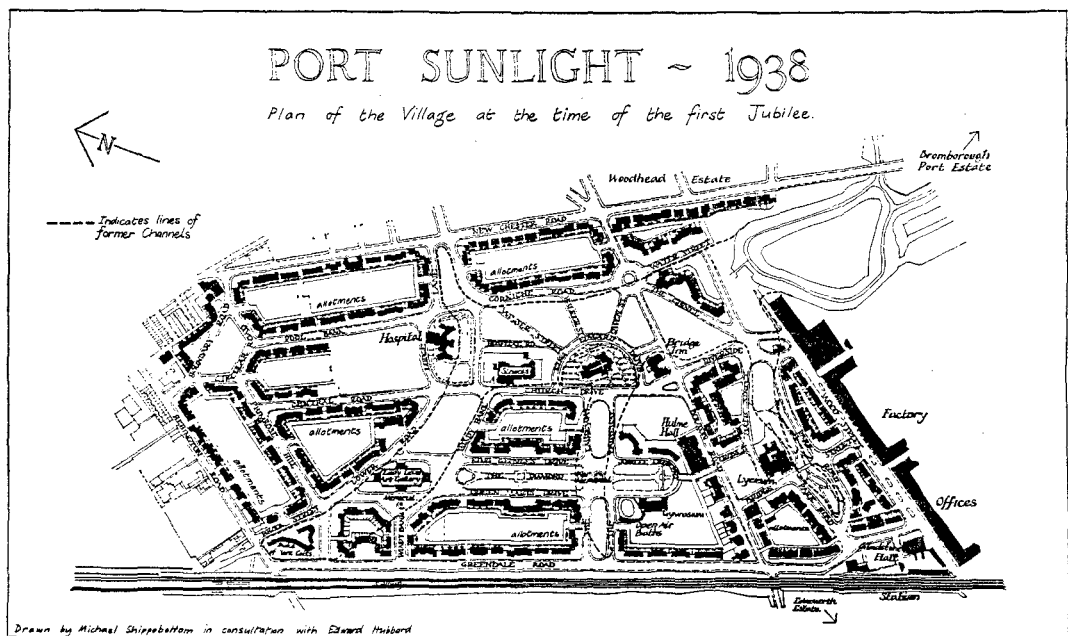


図-6. ポート・サンライト, 1938年完成時 (出典, 図-4と同じ)

することが考えられていたというが²⁷⁾、果たして事実であろうか。

初期の村の都市計画(図一4)を強く規定していたのは、ブロンバラプールに通ずる「E」字型の水路であった。当初この水路をそのまま、あるいは少なくとも地形はそのまま残す計画であったことは、1897年にオーエンの設計でボルトン道路と水路の交差するところにヴィクトリア橋²⁸⁾が建設されたことからもうかがえる。しかしその後、水路は1901年に建設されたダムでブロンバラプールから切り放された。The Dellでは地形が残ったが(残ったからThe Dellと呼ばれるわけだが)、そのほかの部分は次第に埋め立てられて緑地になった。現存するブリッジイン・教会・小学校・病院(現在は療養所)など、講堂(取り壊し)・体育館(移築)などの公共施設の多くはこの水路跡の緑地に分散配置された。このように、埋立てられて緑地になったとはいえ、従来の「E」字型水路が計画の枠組みになっていたことは、1910年までは変わらなかった。

1910年までに建設されたそのほかの施設には、グラッドストーンホール(集会・リクリエーション・男子食堂、現在グラッドストーン劇場)、店舗(現在郵便局兼店舗)、Collegium(協同組合店舗とGirls' Institute=女子学校、戦災で焼失)、学校兼礼拝堂(現在は研修所、現名称Lyceum)、Pavillion(男子クラブ、現名称レヴァークラブ)、Girls' Hostel(女子宿舎、現在資料館と銀行)、ヒュームホール(集会・女子食堂、現在集会・展示場)など、きわめて多様な施設があった。

1910年にポート・サンライトの計画に大きな変更が加えられた。前年の1909年に、水路がほとんど埋め立てられたのを前提に、ということはE字型の水路の存在が計画の制約条件でなくなったことを意味するが、村計画の完成のための競技設計が行なわれた。この競技設計に当選したのは当時リヴァプール大学建築学科の学生であったプレストウィッチ(Ernest Prestwitch, 1889—1977)であった。この案は、図一5に見られるように、水路であった部分を大部分住宅地として開発するとともに、教会およびヴィクトリア橋の東詰めに新

しく計画した広場(Village Cross、後にはThe Circus)を中心にした放射状の道路パターン、ダイヤモンド(The Diamond)と呼ばれていた緑地部分と水路の中間の枝線をつかった十字型広幅員緑地道路の計画など、極めてモニュメント性の強い計画案であった。特に後者は、既設の体育館を移転してまで教会に向かうヴィスタを意識した軸線をつくり出している。また、新しい美術館(Lady Lever Art Gallery)の計画も、正方形の中庭を囲むモニュメンタルな設計であった。

このプレストウィッチ案は当時計画を担当していたJ.ローマックス・シンプソン(James Lomax-shimpson, 1882—1977)の事務所(プレストウィッチは一時期この事務所に勤めた)と造園家モーション(T. H. Mawson, 1861—1933)によってほとんどそのまま実施案に取り入れられた。当選案と違うところは、レディ・レヴァー美術館の位置を変更し、ダイヤモンド・ブールバールの北端に移し、よりヴィスタを意識したものに変わったこと、水路を埋め立てた部分の住宅地開発が抑えられ、緑地として残った部分が少なくなかったことなどの点である。しかし、このプレストウィッチとローマックス・シンプソンの計画により、昔の土地の状況(筆境、水路のパターンなど)に強く制約された従来のポート・サンライトの計画に、アメリカ・ボザールの²⁹⁾といわれる都市デザイン要素が強く付け加えられた(図一6)。

(5) ポート・サンライトのその後

レヴァーブラザー石鹸会社は、1929年にオランダのオランダ油脂連合社(Dutch Margarine Union)と合併し、ユニレヴァー社(Unilever)となり世界企業への道を歩み始める。

ポート・サンライトの建設そのものは1930年代の終りまで続き、プレストウィッチの案では美術館が予定されていた部分におけるコテージの建設と1938年の50周年記念道路(Jubilee Crescent)の建設ではぼ終る。

建設の終わったポート・サンライトは、すぐ第二次世界大戦を迎えることになる。ポート・サンライト石鹸工場は1939年に軍需工場となり、石鹸

生産が軍管理のもとにおかれるとともに、直接的に機関銃の部品から爆撃機の着陸装置の部品にいたる軍需物資の生産に携わることとなった。

ポート・サンライトは1941年に数次にわたる空襲を受けた。特に1941年3月12日の爆撃では、ポールバンク地区で9人の死者を出したのを始めとし、村内の建物に多くの被害を出した。20数戸の住宅が完全に破壊されたが、戦後に再建された。しかし、ポルトン道路とブリッジ街の交差点にあった Collegium と呼ばれていた建物(協同組合店舗と女子学校が入っていた)は戦災で破壊されたままついに再建されなかった。1951年ぐらいまでかけて戦時中の維持管理・補修の遅れとこれらの破壊からの回復が図られた。破壊された住宅の多くは、もとのデザインで再建された。このあたりにも、ポート・サンライトの景観を大事にする努力が読み取れる。

1960年代になると、もはやポート・サンライトは、ユニレヴァー社全体から見ればもちろん、マーシーサイド工場との関係でみても、その従業員のごく一部(マーシーサイド工場従業員の10%)がここに住んでいるに過ぎなかった。いまや世界企業となったユニレヴァー社とポート・サンライトとの関係ははっきりさせる必要があった。そこで、1960年にポート・サンライト住宅地の維持管理にあたるためのユニレヴァー・マーシーサイド会社(ULM)が設立された³⁰⁾。しかし、それ以後もユニレヴァー社はかなりの支出をしてポート・サンライトの改善にあたった。1963年から始まり、1970年代を通じて行なわれた更新事業では、住宅に関しては、裏庭にあったトイレの内部化など、特に設備関係の一新が行なわれた。都市計画で大きかったことは、ポート・サンライト住宅地の配置計画の特徴であったスーパーブロック内のアロットメント(菜園)を廃止し、半分位をガレージ用地とし残りを運動広場などにしたことである。これは住民の自動車保有の増大に対処したものであろうが、建設されたガレージが周囲の建築とマッチしないものが多く、表の道路側の昔ながらの美しい景観を見て裏側に回ると、その景観の落差の大きさにややがっかりすることは否定でき

ない。しかし、日本だったらスーパーブロックを分割してより多くの住宅を収容する土地の高度利用をしていたかも知れない³¹⁾。

また、一部の道路を閉鎖して通過交通の削減を図っていることも車時代の対応策であろう。

(6) 工業村でなくなるポート・サンライト、その現状

ユニレヴァー社(Unilever)は、その後も発展を続けて、現在では世界75ヵ国に事業所を持ち、30万人もの従業員を雇用する世界的企業となった(Williams, 1988:5)。日本でもラックスというブランドの石鹸を通じて(日本)ユニレヴァー社を知っている人は少なくない。

ユニレヴァーのマーシーサイド工場の従業員が約10,000人で、ポート・サンライトの世帯数が約1,000世帯、常にこの3分の1が退職者で占められているので、村に住む従業員は600人くらいということになるという。せいぜい6%の従業員のためでしかないポート・サンライトという現実が、ポート・サンライトの地位を変えるバックグラウンドにあった。と同時に、全住宅中の民営借家の割合がポート・サンライトの建設が始まった1888年には90%であったのに、持家政策の進展で1974年には10%にまでに減っているという状況のもとで、ユニレヴァー社自身がポート・サンライトをアナクロニズムだとみなす状況があった(Sellers, 1988:36)。1976年の借家法の改正で、ポート・サンライトの基礎となっていた社宅としての管理、すなわち工場の従業員でなくなったら住宅を明け渡させるということは、法的根拠を持ち得なくなってきた。

そこで、ユニレヴァー社は1979年に社宅政策を大きく変えて、ポート・サンライトの住宅は空き家になり次第売却するということを宣言し、1980年から実際の売却が始まった。現に居住している人から問い合わせが殺到し、110戸が売却されたのを手始めに、1987年までに920戸のうち350戸がU. L. M. 社から売却された。さらに購入した人が転売する例も出てきて、現在村を歩くと多くの売却物件が目につく。しかも、買う人の中にはこ

の地域に仕事を持つ人だけでなく、ポート・サンライトの歴史と環境を愛する人が買う例もできて、多くの新住民が住み着くようになってきているという。

建設されてから100年、いま我々が現地で目にするのは、社宅団地であることをやめつつあるポート・サンライトであり、工業村としての歴史は閉ざされつつあるといえよう。

ポート・サンライトの現状は、その慎重な計画・建設の経過と、その後の十分な維持管理の結果、本当に絵のような環境と建築デザインの展示場のような美しい建築群、村全体が文化遺産としての様相を保っている。私が村を訪れたときも、バスでこの素晴らしい村を訪れた観光客の一群が居た。おそらく、この村を訪れた後さらに同じように古い町並みが保存されているチェスターを訪れるというバスツアーなどがあるだろう。

しかし、社宅としての存在をやめたポート・サンライトは、その文化遺産ともいえる環境を今後いつまで維持していくことが出来るだろうか。保存地区に指定されたポート・サンライトは外観の変更は禁止されているし、村の環境の維持保全は依然としてU.L.M.が責任を負っている。U.L.M.は村の住宅がすべてその手を離れると予想されている20年後以後も村の環境に責任を負っていくと宣言している(Sellers, 1988: 39)。そして、そのコストは公共建築の賃貸料などでまかなうと述べているが、次の100年間を現在のような環境に保ってゆくことは大きな困難が予想される。

4. ボーンヴィル (Bournville)

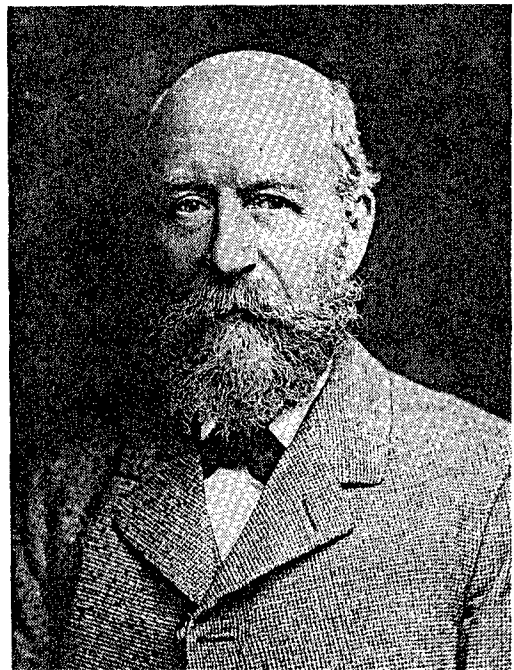
(1) はじめに

今回の国際都市計画史グループ(PHG)の会議が開かれたボーンヴィルについては、下総薫東大名誉教授が「美しき村ボーンビル」という一文を雑誌『住宅』の1971年2月号に書いておられる。下総氏はボーンヴィルに一年間生活し、「この地に住み、人々と交わりこの地をこよなく愛した」(下総薫, 1971: 54)といわれるだけに、その歴

史、当時の現状をきちんと紹介されているし、詳しい年表もつけられている。たった二度訪れただけの私が改めて紹介するまでもないとも思うが、本稿の、19世紀のいくつかの工業村を紹介するという趣旨からいってボーンヴィルをはずす訳にはいかない。また、下総氏が滞在されたのは1969—70年であり、資料も主として1955年頃までのものによっておられるので、その後を補うことは意味があるだろう。そこで、重複する事になることを恐れず、ボーンヴィルの計画と建設の全体にわたって述べたうえで、特に最近の動きについてふれておくことにする。

(2) G. カドベリーとチョコレート工場

ジョージ・カドベリー (George Cadbury, 1839—1922) (図—7) は、1939年にバーミンガムで熱心なクエーカー教徒の家庭に生まれた。彼が社会事業に興味を持ったのは、家庭の宗教的雰囲気によるところも大きい。しかし、ボーンヴィルの建設を思い立った動機は、1859年から労働者向け成人学校の講師をする事を通じて労働者の生活実態



図—7 ジョージ・カドベリー (Henslowe, 1984より)

に目を向け、庭も緑もない裏街の一部屋しかない住宅に住まなければならぬ生活では、気分転換には酒場に行くしかないという事実に触れ、このような生活条件の改良なしにはいくら成人学校で教育を行なってもだめだということを知ったことによるといわれる(Aldridge, 1915: 146)。1861年に、彼は兄のリチャード(Richard Cadbury)とともに衰退しかけた父のチョコレート製造の事業を受継ぎ大いに発展させた。事業の発展にともなう工場の拡張と、食品工業のため清潔な環境のため、パーミンガムの都心のブリッジ街(Bridge Street)にあった工場の移転が必要となり、1879年に郊外のボーンブルック(Bournbrook)に移転することとし、これを機会に労働者の住宅改善に取り組むことを決意する。

(3) ボーンヴィルの計画と建設³²⁾

工場の拡張移転にあたって選ばれた敷地は、カドベリーの従来工場もそこにあったパーミンガム市の中心から、4マイルの郊外のボーンブルックであり、ボーンヴィル(Bournville)と名付けられた。ここが選ばれたのは、食品工業に必要な清潔な環境、特に新鮮な水の存在と、良好な交通条件が理由であった。水は、敷地を東西に流れる小川のボーンブルックから得られた。交通条件は、敷地の東側をミッドランド鉄道(Midland Railway)が通り、さらに鉄道に沿ってウースター・パーミンガム運河(Worcester Birmingham Canal)が流れていた。

カドベリーは、自分の郊外生活の経験からチョコレート工業のためにも労働者の生活の場としても、郊外の良好な環境が必要である考え、土地を選んだといわれる。

敷地における配置計画は工場用地を鉄道・運河沿いの土地に配置し、地区内を東西に流れる小川(Bournbrook)沿いに男子運動場と公園、道路をはさんで女子運動場が取られる。現在の工場は、高層のビルになっているが、初期の工場は当時の写真(Cadbury G. Jr, 1915: 75)によれば低層の工場であった。

工場建設と同時に16戸³³⁾の住宅が建設され、工

場の職長を含む人達の住居に当てられた。ここまではごく当たり前の工場と社宅の関係であり、ボーンヴィルは工業村へのスタートを切ったといえよう。建設された住宅は、トンネルバック³⁴⁾といわれる当時の一般的住居形式に基礎をおいていたが、一般市街地の労働者住宅からみれば規模も大きく極めて高い水準のものであったといわれる。

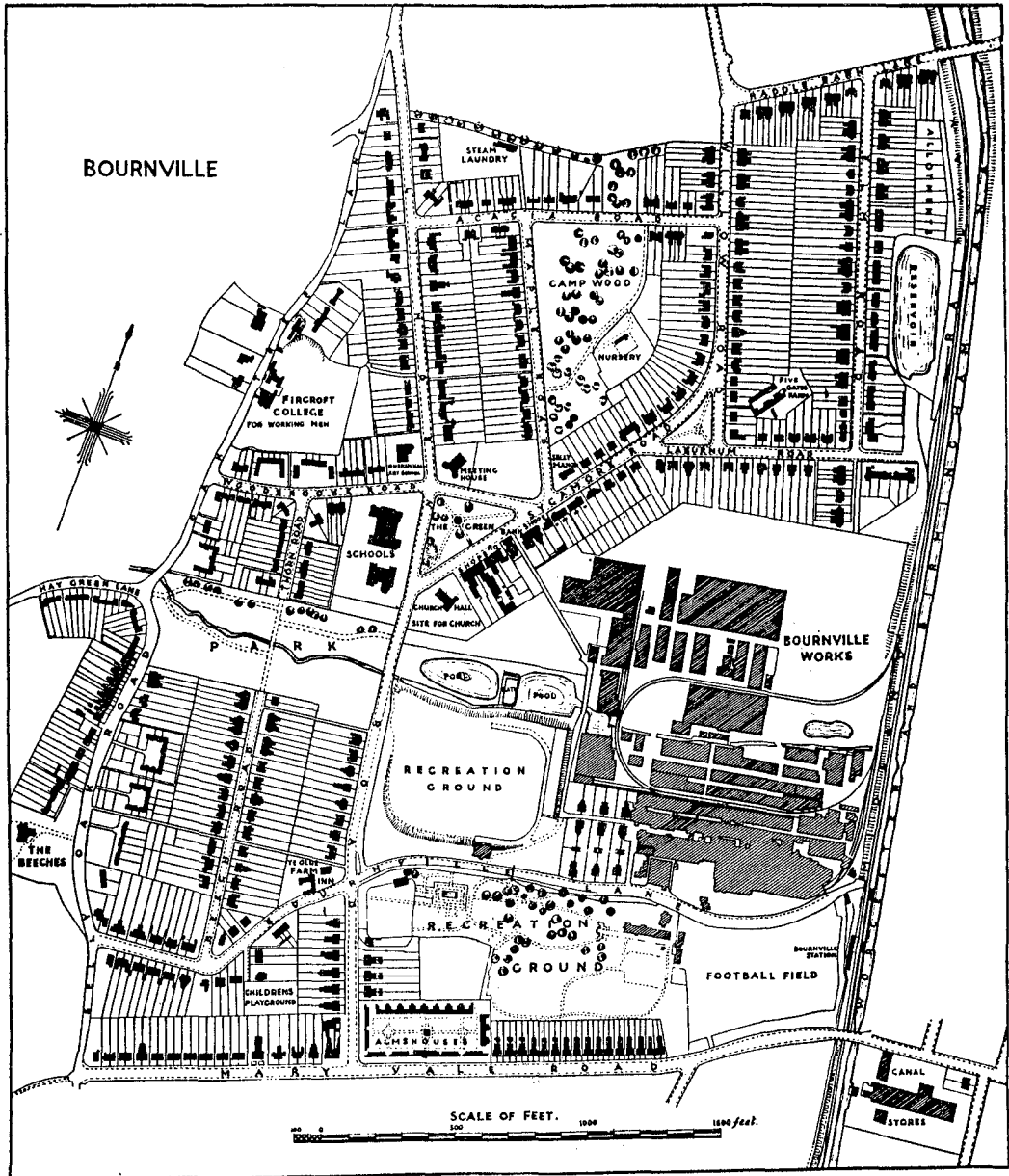
しかし、カドベリーは工場建設に続き、労働者向けではあるが相当立派なコミュニティを供給するという計画にとりかかる。カドベリーはこのために、The Bournville Building Estateを設立した。この住宅地はカドベリーの工場の労働者が多く入ることになるが、必ずしもそれだけを対象にしたものではなかった。いわば、ボーンヴィルは、早い時期から特定の工場の労働者のための住宅団地という典型的な工業村への道からはずれたのである。カドベリーがこの時期に何を計画しようとしていたのかは必ずしも明かではない。計画はかなり流動的で、1894年にはクエーカー・コロニー(Quaker colony)を意図していたとさえいわれている³⁵⁾。

まず、140エーカーの土地を買収して始めた最初の部分は、住宅規模や一戸当り建設費150ポンド以上などの条件をつけ、借地権付き(leasehold)の持家を供給しようとしていたから、劣悪な居住環境に苦しむ低所得労働者層向けというより、堅実な労働者が対象とされていたといえる。カドベリーは、投機屋が入り込まないように、住宅の建設にあたって設計図を顧問建築家に提出しチェックを受けるように定めたので、結局、1894年に顧問建築家になったハーヴェイ(Alexander Harvey)がほとんどの建築を設計することになったという。かくして143戸の住宅が建設された。引き続き用地買収が進められ、今度は持家だけでなく貸家も含めた建設が行なわれた。19世紀の終わりまでに土地の規模は330エーカーになり、住宅戸数も313戸に達した。公共施設として、学校や公衆浴場、Instituteなどが予定されていたが、実際にはまだ建設されなかった。

この最初の部分、いわゆるOld Village(図-8)の計画は、カドベリーの計画理念により、ハーヴェ

エイが計画したものといわれる。その計画理念は、①住宅地はカドベリーのチョコレート工場の労働者だけでなく、ここに住みたいという人々、いいかえればバーミンガムの労働者の住宅水準の向上のためであること。②道路を除いた地区面積の10分の1の土地を、公園とリクリエーションの

用地に当てるなど、敷地全体に豊富な緑地・オープンスペースをとること。③住宅は単調な長屋建てではなく、田園風の2～4戸建てコテージとすること。④個々の住宅には細長い敷地を与え、住居は敷地の25%以上を占めないこと、建物を道路からセットバックし前庭をとり、屋後は菜園・果



図—8 ボーンヴィルの Old Village (Henslowe, 1984より)

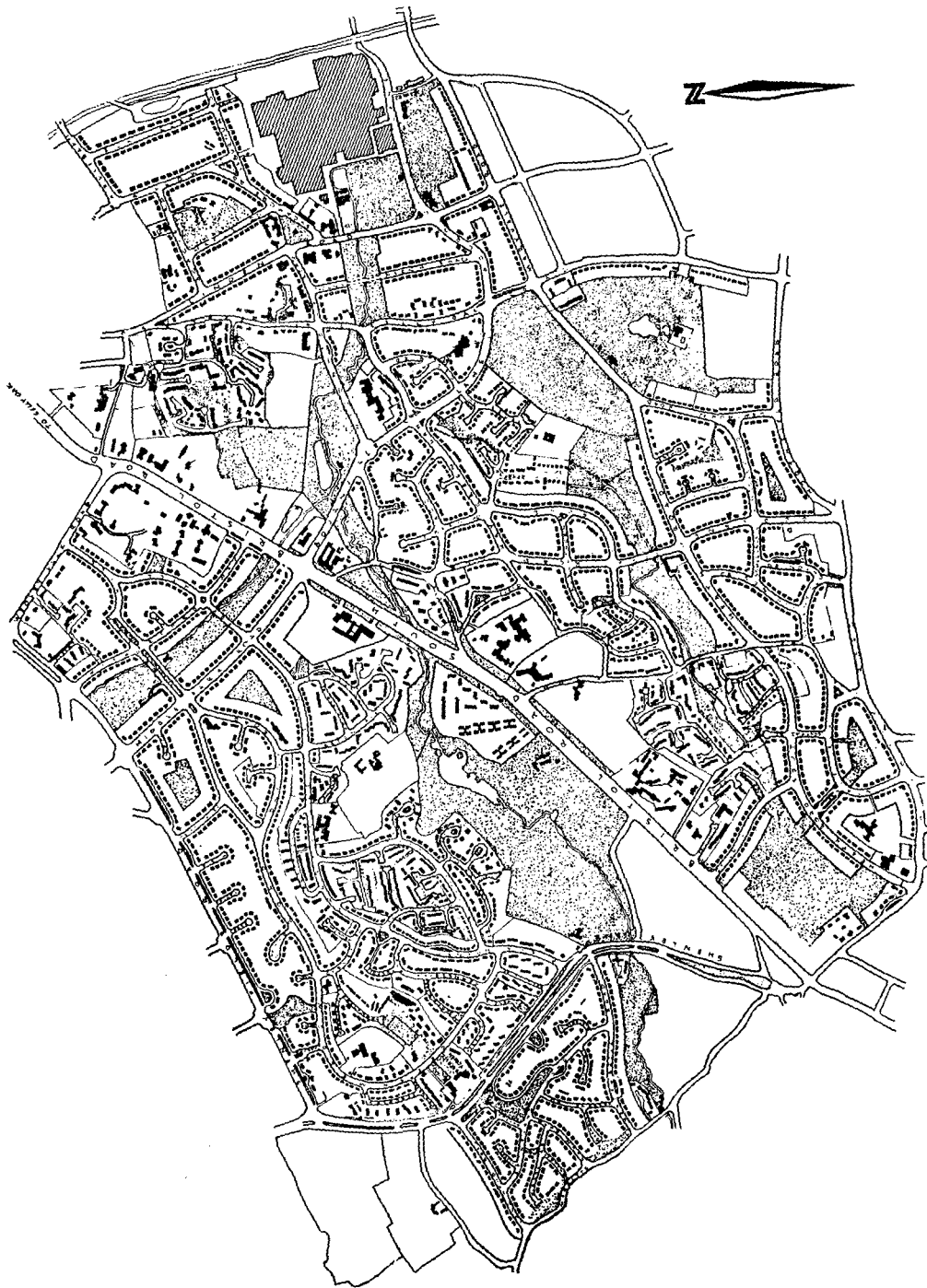


図-9 ボーンヴィルの現状 (Henslowe, 1934より)

樹園をとること、などであった。

特に、ボーンヴィルでは菜園における野菜・果物の生産に居住者が励むことが人々の健康のためにも、また、居住者が払うことになる税金を補填する上でも重要視されていた。カドベリーは、菜園は労働者をパブから引き離すとか、菜園の方が農場製の農地より生産性が高いとか、ボーンヴィルの方が一般の住宅地より健康なものが多いなどの議論が好きだったという (Creese, 1966 : 115)。

1897年に、リチャード・カドベリーが養老院を建設した。これはボーンヴィルにおける住宅の多様化の第一歩であった。収容者はカドベリー工場の従業員が多かったが、必ずしも、それに限らなかった。この点はソルテアの養老院の仕組みと同じである。その運営のためボーンヴィル養老院財団 (Bournville Almshouse Trust) が設立され、養老院に隣接して作られた35戸の住宅を基本財産としてその収益で運営されていた。しかし、リチャードは1899年に死去し、カドベリーのチョコレート工場もジョージ・カドベリーの個人企業となった。

(3) 信託財団の設立と田園都市協会

カドベリーは1900年12月14日に、非営利のボーンヴィル村信託財団 (The Bournville Village Trust, 以下財団と略称) を設立し³⁶⁾、この時点で所有していた330エーカーの土地とそこに建設されていた313戸のコテージを財団に信託した。財団設立の直接的動機は、ボーンヴィルの周辺が急速な市街化にさらされてカドベリーの期待した田園的景観が急速に失われて行きつつあったこと、貪欲な借地人が三年足らずの所有期間で建物を転売して30%以上の利益をあげるというようなことが起こっていたことなどがきっかけであったという (Henslowe, 1984 : 5)。すなわち、非営利財団の設立で、村の経営によって入ってくる収益を住宅地の拡充と改善に投資し、急速に村を拡張することを可能にし、経営管理を強化し投機的動機で村に入ってくることを効果的に防止することなどが考えられたのである。このような、土地の公的所有と管理による開発利益の社会への還元は、

後の田園都市、衛星都市の土地公有化の考え方に通ずるものであった。

しかも、財団の信託協約 (Deed) では、その全体としての目的はもっと大きく、パーミンガムばかりではなく全英国で、労働者階級のおかれた状況を優れた住宅を供給することによって改善することであると述べている。したがって、財団の収益はボーンヴィルの拡張と改善だけでなく他の地域における建築と都市計画の改善にも向けることが出来るようになっていく。余談であるが、財団は第4回のPHG国際都市計画史会議の有効スポンサーとなっていた。このようなことも、財団の目的の一つになっているということであろう。

この財団の設立によってボーンヴィルは大きく発展する。しかし、その発展とは、既にはずれ始めていた工業村への道から、ある意味では決定的にはずれるとともに、田園都市というより田園郊外への道を歩み始めたということでもあった。

財団設立直後の大きなイベントとして、1901年に田園都市協会 (the Garden City Association) の会議がボーンヴィルで開かれたことは、カドベリーとボーンヴィルにとっても、ハワードと田園都市理論にとっても、きわめて意義深かった。ハワードの田園都市論は1898年の“*To-morrow*”の出版によって広く知られるようになり、翌1899年の田園都市協会の発足となったが、それでも世間的にはハワードの理論はまだユートピア思想の一つぐらいにしか考えられていなかった。パーミンガムの市長が会議の歓迎の言葉で田園都市をユートピアあるいは理想と考える人も、ボーンヴィルを訪問するまでちょっと判断を待ってほしいと出席者に述べたのは³⁷⁾、まさにトーマス・アダムス³⁸⁾が田園都市協会の会議をここボーンヴィルで開いたことのねらいを示している。そして、多くの参加者は様ざまな議論はあったものの、ボーンヴィルを目の前にして田園都市理論を実現可能な理想主義と認識したのであった。また、カドベリーにとっても1901年の田園都市協会の会議は彼の業績の格好の宣伝の場であったと同時に、彼とボーンヴィルの行くべき方向を確固たるものにしたといえよう。田園都市協会の会議は翌1902年にはポー

ト・サンライトで開かれ、同様の効果をあげた。カドベリーとレヴァーは工業村を通じて田園都市理論を実証し、宣伝する役割を果たすと同時に、ともに1903年に設立された第一田園都市株式会社の有力な株主となって、レッチワース田園都市の実現にも大きな支持を与えることになる。

(4) ボーンヴィルの発展

第二次世界大戦の始まるまでの40年弱の期間は、財団が順調に拡張と開発の事業を進めて行った時期であった。

カドベリーは多くの階層の人々が混ざりあった地域社会を考えており、この考えに応じて、様々なタイプの住宅供給が行なわれている。1909年には年金生活者むけの住宅が建設されている。また、1920年には独身職業婦人向けの賄い付きフラットが建設されている。

また、住宅の建設は財団による直接建設だけでなく、特別な協会や住宅協同組合によっても建設されることとなった。1906年には、最初の労働者による住宅協同組合として Bournville Tenants Ltd. が設立される。以後、同様の組織の設立が続いた。この住宅協同組合は持家の建設ばかりではなく、借家の建設も目標の一つとしていた。1914年に作られたウォレーヒルの組合は事務労働者向けの借地権付き持家建設をすすめた。ウォレーヒル住宅地はボーンヴィルの中でも質の高い空間をつくり出している。

1929—31年のいわゆる大恐慌の時期には、財団が10シリング住宅 (the ten-shilling houses) と呼ばれる低家賃賃貸住宅を建設したが、これは、ウォレーヒルなどくらべれば質素な住宅計画になっていた。また、その配置計画では日照を重視し、全住戸を南面させたり、南面と北面の窓の大きさを極端に変えるなど「合理的」な新しい考え方を導入していた。しかし、そのデザインは全体的に単調で、それまでのコッテージ風のデザインとはかなり趣を異にしている。これはボーンヴィルの創立者であるジョージ・カドベリーの死去、村の設計における財団建築部の役割の増大、当時の建築界の合理的近代建築の潮流の影響などがあ

るものと考えられる。

第二次大戦直後の財団は、独立でというよりは、戦後の状況の中で政府の住宅政策の強い規制のもとで住宅地開発を進めなければならなくなる。

その最初の計画が、中西部地域³⁹⁾における急速な工業化にともなう大量の住宅需要に対応するため、1950年代前半に Birmingham 市と共同で進められたシェンレー (Shenley) 近隣住区開発計画であった。市からの60年の融資によって実施されたこの計画は、3階建てフラットを含む、580戸という大規模な住宅地計画である。財団の当初計画は、従来の財団の方針に沿ったゆったりとした土地利用で計画あったが、市当局は土地の有効利用による、より多くの住宅の供給を意図していたので、財団は計画の変更を行ないオープンスペースをつぶし、3階建てのフラット形式の住宅を導入することをやむなくされた。3階建てフラットという形式は、ボーンヴィルにとって全く新しい住居形式であった。入居者についても市当局が選考の権利をある程度保有するという事になった。残りのシェンレー地区の開発は財団の手によって1970年代初期まで建設が進められた。

1960年代には、ブリストル道路とウォレーヒルの間の土地が民間不動産業者に賃貸され、現代的な8階建てフラットを含むミドルパークファーム団地が建設されたが、財団の手による他の地区の住宅とは全く異質で、極めて不評であった。その後、この団地は財政的破綻によりパーミンガム市の管轄に移されて現在に至っている。

財団による住宅建設も着実に続けられた。その中で、高齢者、虚弱高齢者、単身婦人とその両親、障害者、母子家庭などの様々な特別な需要に対する住宅供給、また、若い人達向けの新しい様式の住宅設計も導入され、ボーンヴィルはきわめて多様な人びとが住むことの出来る住宅地に成熟してきた。これも、財団がその財政力と計画力を使って常にボーンヴィルにとって何が必要かということを考えてきたからであろう。

(5) 開発の続く田園郊外ボーンヴィル、その現状

ボーンヴィルは現在ではバーミンガム市の市街地に完全にのみこまれ、周辺の地区とひと続きの住宅地となっている。カドベリー社のボーンヴィル工場は増築されチョコレート・アイスクリーム工場として活発に操業中である。

ボーンヴィルの1987年の現状は(B.V.T, 1988), 地域面積が約 400ha, カドベリーが最初を買収した土地面積の約7倍, 財団が発足したときの約3倍にまで拡張されており, 住宅数は実に7,473戸をかぞえ, 財団発足当初の約24倍にも達している。内訳は, 貸家3,753戸, 共同所有50戸, 持家3,670戸である。さらに貸家の内訳は, 財団所有2,377戸, 住宅組合所有601戸, 地方自治体所有499戸, カドベリー社所有41戸などである。持家のうち, 借地権付き持家(leasehold)が2,602戸, 持ち地持家(freehold)が1,068戸である(図-9)。なお財団は, ボーンヴィル地区の中に緑地として存在する農場の他に, バーミンガム市域の南西の外側に約1,200haの農地・林地を所有または管理⁴⁰⁾している。これらの農地は大部分農民に貸し付けられており, 住宅地で収穫祭などが開かれ住民との結びつきが図られている。

ボーンヴィル住宅地は, ボーンヴィル村信託財団(Bournville Village Trust)が現在も管理している。財団は12名の評議員によって運営されており, 現在の議長はジョージ・カドベリーの孫娘にあたるウッテン女史(Mrs. V. Wootten)が勤めている。評議員にはカドベリー一族の他に, バーミンガム大学のG.E. チェリー教授, フレンド協会(クエーカー), バーミンガム市などからも参加している。財団職員は1987年現在で事務所に73名, 現業58名のほか, パートタイム職員6名という大所帯である。これは勿論, ボーンヴィル住宅地の管理に, 例えば緑地の管理だけで15人の庭師を使っているなど, 多くの人手を要することもあるが, 計画部門はボーンヴィル以外の地域で住宅都市計画などのコンサルタント業務を行なっていることによるものと思われる。なお, 下総(1971)によれば財団の職員数は51名となっている。いつ

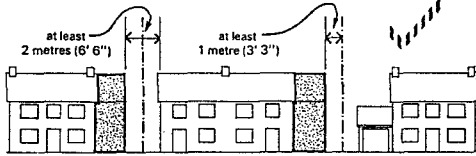
の時点か明かではないが, 下総氏が滞在した1970年当時とすると, その後かなり急速に増加しているといえる。財団の財政は, 1987年で, 収入279万ポンド(約6.7億円)で, 内訳は家賃81%, 他の賃料8%, 土地建物売却7%, その他となっている。これに対して支出は, 272万ポンド(約6.5億円)で, 内訳は賃貸不動産の維持管理62%, 運営事務16%, 団地管理12%, コミュニティサービス5%, 計画調査5%などとなっている(B.V.T., 1988)。財団の年報によれば, 通常収入で支出を賄えなかったので土地住宅の販売で帳尻をあわせたという。

最近の大きな問題は, 1967年に制定された借地権改革法(Leasehold Reform Act)が一定期間居住した借地権者に所有権を買い取ることを可能にしたことである。いままで財団は, 貸家の部分はもちろん借地権付き持家に対しても土地所有者として環境管理あるいはデザインコントロールにあたってきた。初期のThe Estate以来, 借地権付き持家に関しては, そのプランを土地所有者, すなわちThe Estateまたは財団の建築家の承認を受けることを義務づけていた。しかし, 持地持家になった住宅の増改築や敷地利用に関しては土地所有者としてのコントロールは効かなくなる。そこで, これに対応しボーンヴィルの環境を守るため, 信託財団は, 借地権改革法の定めるところにより高等裁判所の裁定を受けて管理計画(The Scheme of Management)を1972年に確定した。現在この規約を運営するための管理委員会は, 四つの住民組織から選挙で選ばれた委員と4人の財団評議員で構成されている。これは制度的には日本の建築協定にあたるといえようが, その内容は建物の細かいデザインに及んでいる。財団は住民向けの詳細なデザインガイドのパンフレット(B.V.T., 1985)をつくっている。このパンフレットは40ページ程の冊子で, 趣旨, 留意点, 手続きの解説に続いて詳細なデザイン基準を図解により分かりやすく示している(図-10参照)。手続きに関しては, 住民は建物・敷地の改造および利用変更にあたって, 工事を始める前, 地方自治体に計画を提出する前に, 財団の承認をとることが求めら

4.1.6 TWO OR THREE STOREY EXTENSIONS AT THE SIDE OF YOUR PROPERTY

Two or three storey extensions are permitted at the side of your property provided that:—

1. There is a distance of at least 1 metre (3' 3") between the proposed extension and the boundary, and
2. There is a distance of at least 2 metres (6' 6") between the proposed extension and your neighbour's property.



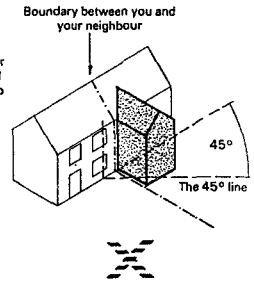
This guide line ensures that linking of adjacent properties and the creation of terraces of houses does not occur.

4.1.7 THE 45° RULE

This rule ensures that overshadowing of your neighbour's property, at the front or the rear, does not occur.

REMEMBER that you or a future occupier may wish to build over an existing ground floor extension and the rules covering two storey extensions are different to those covering single storey extensions.

ENSURE that this can be done without infringing this rule.



This extension does not comply with the rule as it crosses the 45° line drawn from your neighbour's window.

図一〇 ボーンヴィルのデザインガイド (B.V.T., 1985より)

れている。しかし同時に、パンフレットでは、近所の人とよく相談をなさいとも書いている。財団の承認が得られなかったときには、住民は管理委員会にアペールが出来ることになっている。増改築のデザイン基準では、窓の改造から、屋根の傾斜、建築線との関係、境界線からの距離、既存建物との材料上の取り合わせ、ポーチ、ロフトなどに関して極めて周到に基準が決められている。増築に関し非常に興味深い規定として45°ルールがある。これは隣家の窓の日照・見晴らし等を遮らないために決められたルールである(図一〇右)。しかし、現地で見ただけでは、特に前面道路側への2層分の増築は、ルールを守った場合でも従来の景観を損ねている例が少なくないように思われた。なおOld Villageなど歴史的価値の高い地区は環境省により保存地区に指定されている。このほか、多くの建物が個別に保存建物に指定されている。

ボーンヴィルは19世紀に工業村としてスタートし、田園郊外の時期を経て、戦後の公的隣住区開発の場になるなど、一つの地区でイギリスの住宅地開発の歴史の流れのさまざまな局面を体現している興味深い地区である。しかしボーンヴィルは単に歴史的存在にとどまらない。実は現在も、拡張し開発され続けているのである。

財団は1983年にカドベリー・シュエップス社所有のローヒース(Rowheath)地区の土地66エーカー(約26.7ha)⁴¹⁾を買収し、そのうち19エーカーを住宅地として開発し、45エーカーをスポーツ施設とオープンスペースに当てる計画を実行した。

さらに、1988年には「ヨットの湖」公園に隣接するウッドブルック(Woodbrook Road)で47戸の住宅開発に着手した。この敷地は新たに買収したのではなく、Old Villageにも近い財団が従来から所有していたが未開発であった土地である。この開発プロジェクトは、私がボーンヴィルを訪れた1989年の秋にもなお工事中であった。このプロジェクトを進めるためにボーンヴィル村開発会社(Bournville Village Development Ltd.)が設立されている。完成後の住宅は直接需要者に、あるいは財団に売られることになっている。

5. おわりに一田園都市論と工業村

(1) 三つの工業村

以上、19世紀のイギリスにおける工業村について、その歴史と現状を見てきた。

それぞれの工業村は、計画時期の違い、計画した工場主の性格の違いもあって、少しずつ違った内容を持っている。ソルテアは、規模が大きく公共施設が整ってはいるものの、計画的にみれば「社宅団地」の域を出ないが、1850年代という時代的な先駆性が注目される。ディズレーリの小説をソルトが読んでいたかどうかは分からないが、その小説の先駆性に現実性を与えたものといえよう。ポート・サンライトは、なんといっても、後の田園都市・田園郊外の計画に影響を与えた建築・都市デザインにおける貢献が注目される。ボーンヴィルはカドベリーが財団を作って土地・住宅を信託し、その開発利益を地区の整備と拡張につぎ込

表一 ポーンヴィルとバーミンガムの密集区の児童体位の比較

			6才	8才	10才	12才
身長 (cm)	男児	ポーンヴィル	112.0	122.7	131.8	139.2
		セント・バーソロミュー区	106.4	117.3	125.0	132.8
	女児	ポーンヴィル	112.3	123.4	132.3	142.2
		セント・バーソロミュー区	105.9	113.8	122.2	134.9
体重 (kg)	男児	ポーンヴィル	20.4	24.0	27.9	32.6
		セント・バーソロミュー区	17.7	21.7	25.4	28.7
	女児	ポーンヴィル	19.7	22.8	28.2	33.9
		セント・バーソロミュー区	17.9	20.7	24.4	29.8

出典：G.Cadbury Jr,1915:129;Aldridge,1915:131;Clark,1920:216

表二 ポート・サンライトとリヴァプール
の14才児体位の比較

	身長(cm)	体重(kg)
リヴァプール:		
有名学校	156.7	42.9
公立学校(a)	147.8	34.4
公立学校(b)	142.8	34.4
公立学校(c)	140.2	32.3
ポート・サンライト	154.2	47.6

出典：Aldridge,1915:131;Clark,1920:217

表三 ポーンヴィルとバーミンガムの
死亡率比較

	死亡率 (/1000人)	幼児死亡率 (/出生1000)
ポーンヴィル	5.7	41.4
バーミンガム	14.0	114.8

出典：Clark,1920:77

んで成功させたシステムが目される。

これらの工業村は、計画した工場主が先進資本主義国イギリスにおいて成功した企業家であり、その財力を背景に、その個人的性格、すなわち組合立教会・クエーカーといった宗教性、パターナリズムに基礎をおいている。それだけに、そのパターナリズムに対しては、激化しつつあった労働問題を緩和する目的を持った、自分達企業家を労働者階層より一段高いものと位置づけた「善導」型のものであるという批判が当然あり得る。ソルトに対しては、「せいぜい宗教活動のために気前よく施しものをする程度のひとつ」という批判があるし⁴²⁾、ソルトが進めようとした労働者の生活改善に対しては村の労働者からも反発があった。ポ

ート・サンライトについては、「独立心を持ったものならとてもいたたまれない雰囲気」という批判がある (Creese, 1966 : 108)。カドベリーについても、健康のためとはいいながら、はく靴の種類まで注意をするような (Creese, 1966 : 109) 生活の隅々までの指導にたいしては、批判もあろう。

しかし一方で、これら工業村の生活が健康的で快適であったことも事実である。これらの工業村が一応のまとまりを見せる1910年代以後の住宅問題に関する文献では、ポーンヴィルやポート・サンライトと一般都市との死亡率や子供の体位の比較が計画の成果としてしばしば取り上げられている (表一、表二、表三) (Cadbury Jr, 1915 : 122—138, Aldridge, 1915 : 130—132, Clark, 1920 : 77)。

(2) ハワードの田園都市論と工業村

ハワードの田園都市論は、産業革命期を経過して、公衆衛生などの側面から多くの改善の努力が払われながらも、都市の巨大化がいつそう進行し、都市問題のつぼとなったのを取り上げ、その解決策として、都市と田園の調和した「田園都市」を提案した。それまでの建築家・都市計画家を中心としたモデル都市・理想都市論が、むしろ都市の形態において理想像を追求したのとは異なり、ハワードの「田園都市」の空間的イメージは、あまり明確ではない。むしろ「田園都市」論の重要な意義は、田園都市を建設することが大都市を改良するよりは経済的に実現可能であり、田園都市が「経営的」にも成り立つことを論証した点にある。

ハワードは自分の提案した「田園都市」論は、過去の様ざまな提案のユニークな結合に特色があると述べている。彼は、「田園都市」論はいままで誰も結び付けようとしなかった三つの異なった提案、すなわち、①E.D.ウェークフィールドおよびB. マーシャルの人口の組織的移住に関する提案、②最初にT. スペンスが提案し後にH. スペンサーが補強した土地所有システムに関する提案、③J.S. バッキンガムのモデル都市⁴³⁾、を基礎にしたものであると述べている(Howard, 1902, 1985 edn. : 83)。

要するに、田園都市論は産業革命期を通じて論じられてきた様ざまな提案、試行されてきた様ざまな実験の上にたっているのである。ハワードは、彼の提案の一つの源泉としてバッキンガムの実現しなかった工業村の提案をあげている。もちろんハワードが具体的にはバッキンガムの名前をあげているとはいえ、それはロバート・オウエンのニューラナークやソルトのソルテアなどの19世紀における工業村をめぐる多様な主張、多様な実践全体の、一つの例としてあげていると見るべきだろう。では、ハワードはバッキンガムのヴィクトリアの何を評価したのだろうか、彼はバッキンガムのモデル都市の規模、農業と工業を結び付けた就業構造、教会・学校・工場・食堂・様ざまな住居などを持った村の構造などを高く評価する。

ただ、バッキンガムが諸悪の根源である競争を排除するために組織しようとしている巨大な会社組織は、逃れられない「堅い鑄物の組織」として批判し、自らの提案する田園都市は、完全に自由な組織の権利を認め、多様で自由な協同の形態をとるという(Howard, 1902, 1985 edn. : 89—91)。

(3) 日本における田園都市論と工業村

日本における田園都市論の発展については、渡辺俊一氏の一連の研究がある(渡辺俊一, 1977; 1978)。渡辺氏は第4回都市計画史国際会議のキーノートスピーチでは、これらの既往の研究を踏まえて体系的なまとめを行なっている(Watanabe, 1989)。しかし、渡辺氏の研究で言及されていないことが二つある。一つは、イギリスにおける田園都市論の先駆的实践として工業村があることとの関係で当然問題にしなければならない点として、日本では慈善主義的・改良主義的工場主による労働者住宅の改善の試み、あるいは工業村の実践があったかどうかという点である。もう一つは、日本の海外植民地・占領地の都市計画における欧米田園都市論の影響である⁴⁴⁾。

前者、すなわち日本における工業村については、私自身が、その唯一の事例ともいふべき倉敷紡績の大原孫三郎による倉敷萬寿工場職工村の事例を、前述のようにバッキンガムの第4回都市計画史国際会議で発表したが(Ishida, 1990)、いままで日本の工業村に関する研究は余りなかった。もちろん、大原孫三郎の工業村も、私が論文の中で述べたように、イギリスの工業村と比較すれば未熟な、はるかに遅れた水準のものであった。

しかし私は、イギリスの田園都市論の日本への影響を論ずるとき、なぜ日本では改良主義的工場主は生まれなかったのか、なぜ工業村は作られなかったのかをしっかりと論ずる必要があると考えている。それは、ここで紹介した三つの工業村を含む19世紀のイギリスにおける工業村の実践がハワードの田園都市論を生む不可欠の先例であったこと、ボーンヴィルやポート・サンライトがハワードの田園都市論を夢物語ではなく実現可能な計画であることを実証する「生きた証拠」であったこ

と、レヴァーやカドベリーの出資がレッチワースを建設した第一田園都市株式会社の成立の基盤であったこと、ポート・サンライトにおけるレヴァーやオーエン、ポーンヴィルにおけるハーベイなどの住宅・住宅地設計の実践こそが、その後の田園都市や田園郊外におけるアンウィン(R.Unwin)らの計画論の先例であったこと(Creese, 1966: 109-110; Cherry, 1988: 9-11)を重視するからに他ならない。

日本に工業村の実践がほとんどなく、わずかな例もイギリスなどの例に比べて未熟であった理由については、倉紡の工業村に関する論文の中で不十分ながら触れた。要するに日本の資本主義の後進性に原因が求められる。大原孫三郎でさえ、常に一方で算盤をはじき、生産第一主義のためには工業村構想も変更することをためらわなかった。また、カドベリーがポーンヴィルを自分の工場の労働者のためだけではなく、広く労働者階層の住宅改善のために経営したこと、その延長上で第一田園都市株式会社に出資をしたような、社会的住宅をつくるという視点までは持ちきれなかった。日本の田園都市が、洗足住宅地や田園調布を建設した田園都市株式会社のように、結局のところ利潤追求の性格を持ってしまうのも、この日本資本主義の底の浅さによるといえないだろうか。

注

- 1) 1974年に設立された英国に本部をおく都市計画史に関する国際学会。会長は、バーミンガム大学地理学科ゴードンE.チェリー教授。機関誌としてPlanning History(年3回刊)を発行。
- 2) この会議の概要については、S.V. Ward “The garden city tradition re-examined” Planning Perspectives, Vol. 5, No. 3, pp. 249-256 参照。
- 3) E. ハワードこの本は、1898年に“To-morrow: A Peaceful Path to Real Reform”として出版され、1902年に“Garden Cities of To-morrow”としてロンドンのSwan Sonnenscheinから再版された。日本訳は、長素連訳『明日の田園都市』鹿島出版会、1968がある。
- 4) Ishida, 1990. 掲載誌Planning Perspectives, Vol. 5, No. 3 には、この会議で発表された論文が、他に

も4編収録されている。

- 5) 日笠端『都市計画』共立出版, 1977 は都市計画の教科書としては最も多くの版を重ねているものだが、この三つの工業村については、それぞれ2~3行の短い紹介文と図版を掲げている(同書 pp. 7-10)。土井幸平他『新建築学大系16 都市計画』彰国社, 1981では、工業村の名前だけを紹介している(p. 123)。光崎育利『現代建築学 都市計画』鹿島出版会, 1984 には、三つの工業村(この本では工住都市)の名前と図版・写真だけを載せている(pp. 50-58)。
- 6) イギリスの政治家・作家であるディズレリー(Benjamin Disraeli)の小説“Sybil, or The Two Nations”および“Coningsby”。1840年代に企業家のつくる理想的工業村の情景を描写した小説として有名。
- 7) ソルトを含む19世紀イギリスの毛織物工業については、天川, 1971; Sigsworth, 1958などを参照のこと。
- 8) 小林(1974b)に引用されたG.D.H. Coleの“Sir Titus Salt”による。
- 9) 前注参照。
- 10) ディズレリーとツピルについては、注6)および、ベネヴォロ(1976: 157-164)を参照。
- 11) ベネヴォロはこのような考えを、C. スチュアートを引用して述べている(ベネヴォロ, 1976: 165)。片木も、この考えを強く示唆しているが(片木, 1987: 169-171), 論証しているわけではない。レイノルドも、このような考えがあるとしているが証明されえないとする(Reynolds, 1985: 7)。
- 12) ニューラナークを建設したロバート・オウエンの思想の信奉者の意味。
- 13) 小林は、アッシュワースを引用しながらこのように示唆する(小林, 1974b: 234)。しかし、アッシュワースはソルテアについては工場を作る前から住宅地を含む「完全な都市」を建設する計画があったと指摘する(アッシュワース, 1987: 148-149)。
- 14) この項の記述は、Reynolds, 1985によるところが大きい。客観的な事実は煩雑を避け引用の明記を省略する場合がある。
- 15) 後にソルテアの所有者となり、この公園を市に寄付したJ. ロバーツの名前にちなんだものである。
- 16) アッシュワース(1987)が引用したA. Holroydの“Saltaire and its Founder”の記述による。なお、ソルトは、この食堂への投資の5%にあたる料金を独立採算の食堂経営から徴収していたという(Reynolds,

- 1985: 20)。また、アッシュワースはこの食堂が残飯の販売で年間50ポンドもうけたと指摘しているが、それがソルトの収入か食堂経営の収入かは明らかではない（アッシュワース、1987: 150）。
- 17) 岩倉使節団の訪問は、当時の英国国内あるいは外国からの訪問者の一例としてイギリスの文献でも紹介されている（Reynolds, 1985: 12）。
- 18) 引用は岩波文庫版『米欧回覧実記』第二巻, pp. 284-288。
- 19) なお、米欧回覧実記には、ブラッドフォードに宿泊した一行が汽車に乗って「二十四英里許ヲ走り、「ソルテア」邑ニ至ル」と記している。ブラッドフォードとソルテアは3.6マイルに過ぎないのでこの当時はロードを回っていったのであろうか？
- 20) タイタス・ソルトを誤ってこのように記している。
- 21) 岩波文庫版『米欧回覧実記』第三巻, pp.84-88。
- 22) 注16) 参照。
- 23) 1870年代には、ソルテア工場の利潤の源泉であったアルパカとモヘアは流行の変化から需要が落ちたこと（天川、1971: 48）また、そのことが、たまたまタイタス・ソルトの死去とも重なったことが工場衰退の原因とも考えられる。
- 24) レヴァーとポート・サンライト工業村については、Sellers (1988); Hubbard & Shippobottom (1988) によるところが多いが、客観的事実に関する部分は煩雑を避けるため引用文献の明記を省略しているところもある。
- 25) 1931年には、ここにドックが建設され、港湾としての荷役機能が大幅に改善された。
- 26) ほぼこの地図に相当する時期の写真がSellers(1988: 10) に収録されている。
- 27) Creese が引用した M.E. Marcartney の論文による。しかし、Creese もこの説には証拠はないとしている（Creese, 1966: 110）。
- 28) この橋は運河の埋立にともない地中に埋められ、現在でも地中に存在するという。
- 29) 1904年にリヴァプール大学につくられた建築学科と1909年にレヴァーの10万ポンドの寄付で設けられた都市計画学科の教育方針はアメリカ・ボザールであったという（Creese, 1966: 133; 片木, 1987: 186）。
- 30) 最初はユニレバーサービス会社と名乗ったが、1968年名称変更してユニレバーマーシーサイド会社となった。
- 31) 注27) に示したようにポート・サンライトでも、もともとこういう考えがあったという説もある。
- 32) カドベリーとボーンヴィルについては、主としてHenslowe (1984) によっているが、煩雑を避けるため事実に関する部分は引用・出典を明示していない部分もある。
- 33) 工場建設とともに最初に建設された住宅の戸数については、15戸とする文献（下総, 1971: 56）、24戸としている文献（Creese, 1966: 111）もあるが、ここでは、Henslowe (1984: 2) によって16戸としておく。
- 34) 奥行き大きな独特の平面の二戸建て住宅を、裏庭に通ずるトンネルのような通路を介して長屋式に連続した建築形式。ボーンヴィルの初期の住宅は、規模は大きいがトンネルバックの平面形式を分離して二戸建てとしたものであるが、トンネルバック式に4戸ほど連続した住宅もある。
- 35) Harrison (1989) の引用によるカドベリー自身のA.P. Walker えて1894年の書簡。
- 36) 信託制度とボーンヴィル村信託財団については、下総 (1971: 57-58) を参照のこと。
- 37) Harrison (1989) が引用した、田園都市協会の1901年会議の会議録（Garden City Conference at Bournville: Report of Proceedings, 1901）。
- 38) Thomas Adams. 当時田園都市協会の事務局長であり、R. アンウィンとともに田園都市運動の理論的支柱であった。アダムス、R. アンウィンについてはゴードン E. チェリー（大久保昌一訳）『英国都市計画の先駆者たち』学芸出版、1983を参照のこと。
- 39) ボーンヴィル村信託財団は「中西部の戦後復興と計画に関する研究グループ（West Midlands Group）」を組織し、精力的な研究を行なった（Henslowe, 1984: 21）。
- 40) 管理している農林地の中には、財団所有のもの他に、ナショナルトラスト所有のものがあるという（Henslowe, 1984: 20; B.V.T., 1988）。
- 41) 利用土地面積の合計が買収土地面積とあわないが、資料（Henslowe, 1984: 22）のままに記載しておく。なお、この土地はカドベリー社が当初運動用地として使っていたが最近では利用されていなかったという。
- 42) 注8) 参照。
- 43) James Silk Buckingham (1786-1855) が、その著書“National Evil and Practical Remedies”の中で示した理想都市ヴィクトリアのこと。バッキンガムとヴィクトリアについては、ベネヴォロ (1976: 180-

183)などを参照のこと。
44)例えば、内田祥三・高山英華他による大同の都市計画では、工業・鉱業の二つの衛星都市が計画されていた。

文 献 一 覧

アッシュワース W. (下総薫監訳)

1987 『イギリス田園都市の社会史—近代都市計画の誕生—』お茶の水書房

天川潤次郎

1971 「19世紀におけるイギリス繊維工業企業家の活動—Ashworth 家と Foster 家—」『経済学論究』24巻3号, pp. 23-56

片木 篤

1987 『イギリスの郊外住宅—中流階級のユートピア』住まいの図書館出版局

川添 登

1966 『都市と文明—古代から未来まで—』雪華社

木戸孝允

1932 『木戸孝允日記』第2巻 日本史籍協会

小林 巧

1974 a 「明治初期の労働者政策—女紅場を中心として—」『経済集志』44巻2号, pp. 1-13

1974 b 「19世紀イギリスの工業村—ソルテヤをめぐる—」『経済集志』44巻3・4号, pp.233-241

久米邦武

1878 『特命全権大使米欧回覧実記』博聞社

1934 『久米博士九十年回顧録(下)』早稲田大学出版部

サトゥアキラ

1961 「Saltaire Mill—Victoria 初期の一企業家の理想」『商学論究』No. 36, pp. 17-29

下総 薫

1971 「美しき村ポーンビル」『住宅』20巻2号, pp. 54-62

内務省地方局有志(編)

1907 『田園都市』博文館

ベネヴォロ L. (横山正訳)

1976 『近代都市計画の起源』鹿島出版会

渡辺俊一

1977 「日本の田園都市論の研究(1): 田園都市株式会社(1918-28)の場合」『都市計画論文集』No. 12, pp. 151-156

1978 「日本の田園都市論の研究(2): 内務省有志(編)

「田園都市」(明治40年)をめぐる』『都市計画論文集』No. 13, pp. 283-288

Adams, Thomas

1935 "Outline of Town and City Planning—a review of past effort and modern aims" Russel Sage Foundation

Aldridge, Henry R.

1915 "The Case for Town Planning" London: National Housing & Planning Council

Bournville Village Trust (B.V.T)

1985 "A Design Guide. Bournville Village Trust"

1988 "Annual Report for 1987"

Cadbury, G. Jr.

1915 "Town Planning—with special reference to the Birmingham Schemes—" London: Longmans, Green

Cherry Gordon E.

1988 "Cities and Plans" Edward Arnold

Clark, John J.

1920 "The Housing Problem. its growth, legislation and procedure" Isaac Pitman & Sons

Creese, Walter L.

1966 "The Search for Environment—The Garden City: Before and After" New Haven: Yale University Press

Durman, Michael

1989 "Citizenship in Bournville before the Great War" unpublished paper read at the 4th PHG Conference

Harrison, Michael

1989 "The 1901 Garden City Association Conference at Bournville" unpublished paper read at the 4th PHG Conference

Henslowe, Philip

1984 "Ninety Years on—an account of the Bournville Village Trust" Birmingham: Bournville Village Trust

Howard, Ebenezer

1902 "Garden Cities of To-morrow" London: Swan Sonnenschein (New illustrated ed. published 1985 by Attic Books)

Hubbard, E. & Shippobottom, M.

1988 "A Guid to Port Sunlight Village" Liverpool: Liverpool Univ. Press

Ishida, Y.

- 1990 "Japanese Industrial Villages and a Reformist Factory Owner" *Planning Perspectives*, Vol. 5, No. 3, pp. 295-305

Purdom, C. B.

- 1913 "The Garden City—a study in the development of a modern town" London: J. M. Dent & Sons

Reynolds, Jack

- 1985 "Saltaire—An Introduction to the Village of Sir Titus Salt" Bradford: Bradford Art Galleries & Museum

Sellers, Sue

- 1988 "Sunlighters—The Story of a Village" London: Unilever PLC

Sigsworth, Eric M.

- 1958 "Black Dyke Mills; a history" Liverpool: Liverpool Univ. Press

Watanabe Shun-ichi J.

- 1989 "Japanese Garden Cities vs the Land Question: The history of the British garden city in prewar Japan" unpublished paper read at the 4th PHG Conference

Williams, Edmund

- 1988 "The First Hundred Years 1888-1988" Kingston: Lever Brothers Limited

William, Iolo A.

- 1931 "The Firm of Cadbury 1831-1931" London: Constable

Key Words (キー・ワード)

Industrial Village (工業村), Saltaire (ソルテア), Port Sunlight (ポート・サンライト), Bournville (ボーンヴィル), Garden City (田園都市)

ENGLISH INDUSTRIAL VILLAGES IN THE NINETEENTH CENTURY
AS FORERUNNERS TO AND EXPERIMENTS ON THE GARDEN CITY IDEA

Yorifusa Ishida*

*Center for Urban Studies, Tokyo Metropolitan University
Comprehensive Urban Studies, No. 42, 1991, pp. 111—139

Ebenezer Howard states in his book that Garden City scheme is a combination of three distinct projects including the model city of James Silk Backingham. Backingham's Victoria, which was an ideal industrial village scheme, not for actual realization, seems to be mentioned by Howard as a typical example of many industrial village schemes, whether realized or not.

Taking as examples three English industrial villages founded in the 19th century, namely, Sir Titus Salt's Saltaire, Lord Leverhulm's Port Sunlight and George and Richard Cadbury's Bournville, which the author visited in 1989, this report refers to the character of the founders, and to the background, planning, development process, changing character and present status of model villages.

Although these industrial villages are very popular in Japan, the author believes that they have not been introduced here sufficiently. Among Japanese books and papers that discuss these three industrial villages, a book by a voluntary group of officers in the Home Ministry, "*Den-en Toshi (Garden City)*", 1907, and a book by Dr. A. Katagi, "*Igirisu no Kogai Jyutaku (English Suburban Housing)*," 1977, are offering a good deal of information about them. However, the former was published in 1907, based on A. R. Sennett's book of 1905 "*Garden Cities in Theory and Practice*", and the latter attaches too much importance to urban and architectural design, so neither of them provides enough information about the history and achievements of English industrial villages.

We can find interesting papers by Japanese scholars on each of the three industrial villages. On Bournville, Professor Kaoru Shimofusa, who stayed there for one year in 1969-70, summarizes Bournville's history from its origin to the 1950s and reports on the conditions at that time in his "*Utsukushikimura Bonbiru (Beautiful Village Bournville)*." On Saltaire, Akira Satoh's paper "*Saltaire Mill—Victoria shoki no Ichi-kigyō-ka no Riso (Saltaire Mill—an idea of an early Victorian industrialist)*" explains in detail about Titus Salt's Saltaire and the English wool textile industry from the standpoint of economic history, but has little to say about the planning history.

Although we can get a good deal of information about the three industrial villages from these books and papers, the author believes that it would be useful to provide more recent information about them, such as how Saltaire Mill stopped its activity and how Saltaire, while maintaining its historical importance, became a common suburban residential area of Leeds and Bradford; how Unilever Co. changed its tied housing policy, how it has been selling Port Sunlight's beautiful cottages one by one since 1980 and how Port Sunlight is gradually losing its character as an industrial village; how Bournville has been expanding its area and maintaining its beautiful scenery and how the Bournville Village Trust is still continuing development activities for new housing estates in the area.

東京都立大学都市研究センター編集委員会

委員長	望月利男
委員	石田頼房
〃	菅原健介
〃	星野信也
〃	増田昭夫

事務局 東京都立大学都市研究センター内

平成3年3月30日 印刷

平成3年3月30日 発刊

総合都市研究 第42号

編集兼発行 東京都立大学都市研究センター
所長 倉沢 進
東京都目黒区八雲1-1-1
TEL (717) 0111

印刷 レアル印刷株式会社
東京都板橋区中丸町29-8
TEL (3955) 7721
